

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(二)

鈴木董

- 一、はじめに
- 二、史料について
- 三、大宰相及び宰相職就任者の確定(以上第百一冊)
- 四、大宰相及び宰相職就任者の経歴(以上本号)
- 五、キャリア・パターンの分析
- 六、おわりに

四、大宰相及び宰相職就任者の経歴

(一) はじめに

前節で検討したように、スレイマン大帝時代に在任した大宰相・宰相は、大宰相九名、宰相一四名、計二三名であ

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(二)

った。うち、大宰相一名、宰相二名の計三名は、前代のセリム一世時代に任命されたものであった。従つて、スレイマン大帝自身によつて任命された者は、大宰相八名、宰相一二名、計二〇名であった。本節においては、これらの大宰相・宰相について、宰相就任の年月日順に、その経歴について順次検討を加えていくこととしよう。

(一) セリム一世任命の大宰相・宰相たち

① ピリー・メフメット・パシヤ

ピリー・メフメット・パシヤは、ピール・メフメット Pir Mehmed ともいう。⁽¹⁾ピール・メフメットは、ルーム・セルジューク朝及びカラマン君侯国の首都であった古都コンヤに近いアクサライのイスラム学院(メドレセ)のシム⁽²⁾デリス Muderis (教授)として名高いジエマーレッティン・アクサラーイ Cemaleddin Aksarayi の子孫であり、父のムヒッティン・エフエンディ Muhiddin Efendi もまたウレマー Ulema (イスラム神学法学者)であった。⁽³⁾ピリー・メフメット・パシヤの生地が父祖の地アクサライであったのか、アマスイヤであったのかは、はっきりしないが、⁽⁴⁾彼がアマスイヤで、ウレマーとしての教育を受けたことは確実である。⁽⁵⁾教育を終えたのち、ウレマーとしてのキャリアに入ったが、初めは、アマスイアのイスラム法廷の書記を勤めたという。⁽⁶⁾イスタンブルに上京して、カドゥ Kadi (イスラム法官)のキャリアに入り、シリウリ Silivri ソフィア Sofya、フィリベ Filibe、セレス Sereş 等のイスラム法官を歴任したのち、ガラタ・カドゥスィ Galata Kadısı (ガラタのイスラム法官)となった。⁽⁷⁾

その後、メフメット二世のヴァクフ Vakıf (宗教寄進財産)の管理人(ムテエヴリ Mutevellî)に命ぜられた。⁽⁸⁾ついで、ピリー・メフメットは、ウレマーとしてのキャリアから、純然たる財務官僚のキャリアに転じた。⁽⁹⁾この転身

の時期については、年代記・伝記集成の類には、確定的な記述がみられず、近代の研究者たちもその時期を確定していない。しかし、オメル・ルトフィー・バルカン教授の刊行した回曆九〇九年附の宮廷の下賜品等に関する帳簿を検するに、同年ラマゼン月一日にメフメット二世のヴァクフの管理人としてメヴラーナー・ピリー・チェレビイ Mevlâna Piri Celebi なる人物が在職している⁽¹¹⁾。この人物は翌シェヴアル月一六日に、バシユ・デフテルダル Başdeftardar (首席財務長官) とも呼ばれるメルリ・デフレダル Rumeli Defterdari (ルメリ財務長官) に昇進したメヴラーナー・カスム・チェレビイ Mevlâna Kâsım Celebi なる人物の跡を襲って帝国の財務組織の第二位に位置するアナドル・デフテルダル Anadolu Defterdari (アナドル財務長官) に任ぜられ、下賜品を賜っている⁽¹²⁾。この記事から、ピリー・メフメットは、回曆九〇九年シェヴアル月に、アナドル・デフテルダル職就任をもって、財務官僚のキャリアに入ったことが知られるのである。

アナドル・デフテルダルとなったピリー・メフメットは、同じ時にルメリ・デフテルダルとなったカスム・チェレビイの下で、少なくとも回曆九一八年に至るまでこの地位に止まったものと思われる。回曆九一八年サーフェル月七日に、王子セリムは、その父バズイット二世を廢して、オスマン朝第九代セリム一世として即位したが、廢帝バズイットは隱棲の地として選んだディメトカ Dimetka に赴く際に、デフテルダル、カスム・チェレビイないしカスム・パシヤ Kasım Paşa を伴った⁽¹³⁾という。史料には、単に「デフテルダル」と記されているにとどまるが、前述のカスムが首席財務長官としてなお在任していたと見るべきであろう。

そのちピリー・メフメットは、時期は詳かでないが、セリム一世の初年、遅くも回曆九二〇年のイランのサファヴィー朝とのチャルドゥランの戦いまでには、ルメリ・デフテルダルに昇進していた。そして、チャルドゥランの戦

その後、回曆九二〇年シャーバン月二三日に、ルメリ・デフテルダルから宰相に任ぜられた。⁽¹⁴⁾その後、回曆九二二年レビー・エル・エツヴェル月二三日に一旦、宰相職を免ぜられたが、⁽¹⁵⁾同年のセリム一世の対マムルーク朝遠征にあたって、イスタンブルの守護を命ぜられた。⁽¹⁶⁾

翌九二三年、エジプト遠征の帰路、シリアで、ラマザン月二八日に、時の大宰相ユース・パシャ Yunus Paşa が、セリム一世の怒りに会って処刑されるや、ピリー・メフメット・パシャに大宰相職が与えられることとなり、イスタンブルからシリアに招かれ、⁽¹⁷⁾回曆九二四年ムハツレム月一三日に大宰相に就任した。⁽¹⁸⁾

ピリー・メフメット・パシャは、セリム一世の没後もスレイマン大帝によって大宰相職に留められ、回曆九二九年シャーバン月一三日に到って、その職を免ぜられた。大宰相免官後は、シリヴリに隠棲し、回曆九三九年レヴィー・エル・アフル月一五日に没した。⁽¹⁹⁾

② チョバン・ムスタファ・パシャ

セリム一世に任命され、スレイマン大帝時代に引き継がれた宰相の第二番目の者は、チョバン・ムスタファ・パシャである。この人物は、ボスニア系であったというから、⁽²⁰⁾デウシルメ系の人物であった可能性が強い。⁽²¹⁾ピリー・メフメット・パシャと近く、その女婿となったと言われるが、⁽²²⁾初期の経歴は詳かでない。『シヅリ・オスマーニー』には、⁽²³⁾「カプジュ・バシユ Kapıcbası をしてベイレルベイとなり」とあるが、刊本の諸年代記によっては、確認しえない。ただ、ボスニア系出身であるのは確実であり、デウシルメ系の可能性が強いのであるから、主としてデウシルメ系によって占められていた宮廷の一言職であるカプジュ・バシユであった可能性は多いにありうる。しかし管見の及ぶところ、史料上確認し得るのは、回曆九二二年シェヴアル月一五日に、モレ More のサンジャク・ベイから、アナド

ル・ベイレルベイスイに任ぜられた時点⁽²⁴⁾以降の経歴である。モレのサンジャク・ベイ就任の時期も明かでないが、回曆九二〇年レジェプ月一日に、チャルドゥランの戦いで、モレ・サンジャク・ベイスイであったハサン・ベイHasan Beyが戦死しているから⁽²⁵⁾、それ以降の時期に就任したことは確実である。当時、きわめて重要なサンジャクの一つであったモレ・サンジャク・ベイスイであったから、既にこの時点でかなり重要な人物の一人となっていたと言える。

アナドル・ベイレルベイスイ職には、ごく短期間のみ留まり、翌九二三年ムハッレム月一日には、宰相に進んだシナン・パシヤSinan Paşaの跡を襲ってルメリ・ベイレルベイスイとなった⁽²⁶⁾。その後、回曆九二五年ムハッレム月二六日に、ルメリ・ベイレルベイスイから宰相に転じた。

セリム一世が没した時には、第二宰相の地位にあり、スレイマン大帝即位後もこの地位を守った。その後、既に第三節で見たように、回曆九二八年末に一時、ムスル・ベイレルベイスイとして転出し、九二九年に再び宰相に戻り、回曆九三五年、第二宰相在任中に没した。

③ フェルハト・パシヤ

『シジリ・オスマーニー』⁽²⁷⁾では、宮廷出身とするが、宮廷のうちとりわけ重要であった内廷(エンデルンEnderun)に属したか否かは史料で確認し得ない。しかし、ペチエヴィーによればアルバニア系であり⁽²⁸⁾、九二六年附文書にその父の名がアブドゥルハイとあってデウシルメ系と推定されるうえに⁽²⁹⁾、宮廷組織のうち外廷(ビルンBirun)の要職を歴任しているので、当時の例からして、内廷出身の可能性が強い。

今回使用した史料の中で確認しうる経歴は、回曆九二〇年レジェプ月一〇日に、外廷の要職の一つバシシュ・カプジユ・バシシュBas Kapıbaşlı職から、同じく外廷の要職の一つシリー・マーレムMir-i Alemに転じたところから始

まる。⁽³⁰⁾『シジツリ・オスマーニー』では、その後、イエニチェリ・アースイに進み、ここから回曆九二二年にルメリ・ベイレルベイスイとなったとされているが、ハイダル・チェレビイの日録などによれば、ミリー・アールム職から直接に、回曆九二三年ムハツレム月一日に、アナドル・ベイレルベイスイに昇進し、⁽³¹⁾ついで回曆九二五年ムハツレム月二六日に、ルメリ・ベイレルベイスイとなった。⁽³²⁾

そして回曆九二六年、セリム一世の在世中に、ルメリ・ベイレルベイスイより、宰相に任ぜられた。⁽³³⁾その後は、既に第三節で言及したように回曆九二九年シャーバン月頃に宰相職を免ぜられ、セメンドレのサンジャクを与えられたが、これも免ぜられ、回曆九三二年に、処刑された。ペチェヴィイーに九三二年処刑とあるのは誤りであろう。⁽³⁴⁾

(三) スレイマン大帝前半期任命の大宰相・宰相たち——回曆九二六—九五〇年——

① コジャ・カスム・パシャ

スレイマン大帝の王子時代のララ Lala (傳育掛) であり、おそらくはスレイマン大帝自身によって任命された最初の宰相であるコジャ・カスム・パシャについては、既に第三節で言及したように、伝記的情報に混乱が見られる。近代の研究者の多くが、コジャ・カスム・パシャの伝記を論ずるときに出発点となっているのは、メフメット・スレーの『シジツリ・オスマーニー』中のカスム・パシャの項目である。⁽³⁵⁾スレーは、その中で、スレイマン大帝の傳育掛であった人物の名前を、カスム・サーフィー・パシャ Kasım Safi Paşa とし、その仇名はコジャ Koca ないし ジェゼリー・ザーデ Cezirizade であったとする。スレーによれば、この人物は、ニジャンジュ (国璽尚書) を勤めたメフメット・チェレビイ Mehmed Çelebi の子で、書記として昇進し、アナドル・デフテルダル、ついで回曆九

一〇年にルメリ・デフテルダルに進んだ。免官後、当時まだ王子であった後のセリム一世のデフテルダル Defterdar (財務官) となったのち、シリストレの知事に転じ、王子セリムが父バヤズイット二世に対し行動を起したとき、同地の通過を認めた。セリム一世即位後、後にスレイマン大帝となる王子スレイマンの傳育掛及び財務官となり、スレイマンの即位に際し宰相に命ぜられたが老齡の故をもって間もなく官を辞し、ブルサに隠棲し、回曆九五〇年頃に没したとする。そして、その墓はブルサのエミール・スルタン Emir Sultan にあり、詩人としても名高かったとする。

コジャ・カスム・パシヤに言及している近代の研究者のうちタイプ・ギョクビルギン教授は、ほぼスレヤーに從いつつ、その没年についてヴァクフ文書によって回曆九三七年には既に故人となっていたとする⁽³⁶⁾。また、バヤズイット二世時代に関する詳細なプロソグラフィー(人物研究)を公刊したヘッダ・ラインドルもまた、大綱ではスレヤーに從いつつ、これに増補訂正を加えている⁽³⁷⁾。ラインドルによれば、カスム・パシヤは前出のメフメット・チエレビイの子、又は養子分となった奴隸であったとし、没年についてはギョクビルギンに從い、回曆九三七年以前としている。しかし、スレヤー以来のカスム・パシヤの経歴についての情報の中には、オルホンル教授やメフメット・ゼキ・パカルン等によってすでに指摘されているように、同じくカスムの名を有する何人かの人物の経歴が混同されていると考えられる⁽³⁸⁾。

この混同のうち最も大きなものは、スレイマン大帝の宰相であったコジャ・カスム・パシヤと、ジェゼリー・カスム・パシヤとの混同である。王子時代のスレイマンに仕え、即位後まもなく宰相に任ぜられたカスム・パシヤについて、ジェラルル・ザード、ルトフィー・パシヤは何も言及していないが、ラマザン・サーデ、ペチエヴィー、アター

イーらは、これを単にコジャ・カスム・パシヤと呼んでおり、ジェゼリー、サーフィー等の呼び名は一切用いていない。⁽³⁹⁾ その経歴についても、ベチエヴィー、アターイーらは、スレイマンの王子時代にデフテルダル及びララとして仕えたとし、ラマザン・ザードは王子時代にデフテルダルを勤めたと述べるに止まり、いずれもが一致して、スレイマンの即位後、宰相に命ぜられたと記している。

これに対し、ジェゼリーなる仇名（ラカーブ Lakab）及びサーフィーの雅号（マフラス Mahlas）を有するカスム・パシヤについては、ラマザン・ザードは、スレイマン大帝時代の宰相コジャ・カスム・パシヤの項目とは全く独立に、第八代バヤズィット二世時代の宰相たちの表の中にカスム・パシヤ・イブン・ジェゼリーの項を立て、その中で、バヤズィット二世即位当初にニシャンジュとなり、回曆八八七年に宰相に任ぜられ三年近く在任した後、八八九年に没したと記している。⁽⁴⁰⁾ このことから、少なくともラマザン・ザードの中では、コジャ・カスム・パシヤとジェゼリー・カスム・パシヤが全くの別人として扱われていた事を知りうる。

ここで、「コジャ・カスム・パシヤ」については、諸史書中に甚だ断片的な記述が僅かに見い出されるにとどまるのに対し、ジェゼリー・カスム・パシヤについては、史書のみならず一六世紀に現われ始めた初期の詩人列伝類すべてに、詩人サーフィーとして項目を有している。史書の中では、バヤズィット二世時代に成立したアシユク・パシヤ・ザード及びネシュリーの年代記の中のバヤズィット二世時代の宰相たちの慈善的行為（ハイラート Hayrat）の一覧の中にジェゼリー・カスム・パシヤとして項目が設けられているが、経歴についての言及はない。⁽⁴¹⁾ 同じくバヤズィット二世の最晩年に成立したビヒシュテイー Bihstī の年代記には、「ジェゼリー・カースイミー・カースム・パシヤ Cezeri Kasimi Kasum Pasa」が、「ハヤズィット二世の初年に宰相を免ぜられ、メシフ・パシヤ Meshin Pasa

がこれに代ったとする。⁽⁴²⁾ それ故、ジェゼリー・カスム・パシヤは、バヤズイット二世時代初年の宰相として広く知られていたことがわかる。

詩人列伝について見ると、まずスレイマン大帝の治世の前半、回曆九四五年に成立したオスマン朝最初の詩人列伝であるセヒーの『ヘシュト・ビヒシュト』の中にすでにサーフィの雅号をもつカスム・パシヤの項目が見られ、⁽⁴³⁾ そこで故人の名に付記する「ラフメット・ウツラーヒー・アレヒ Rahmetullahi aleyhi」の語句が附されているところから、この時点で既に故人であったことが知れる。経歴については、バヤズイット二世の王子時代にデフテルダルを勤め即位後宰相に任ぜられ、後に引退してセラニキに隠棲し、墓もセラニキにあると記している。スレイマン大帝に関連する記事は一切見られない。

回曆九五六年成立のオスマン朝で第二番目に古いラティーフィーの詩人列伝においても、カスム・パシヤについて、雅号はサーフィー、ジェゼリー・カースイミーとして名高く、バヤズイット二世の宰相であったと記しているのみで、スレイマン大帝の宰相に任ぜられたことなどには一切言及されていない。⁽⁴⁴⁾

一六世紀末に成立したアーシユク・チェレビイとハサン・チェレビイの詩人列伝にも、バヤズイット二世時代の宰相であったことのみが述べられているにすぎない。⁽⁴⁵⁾

同じく一六世紀末成立の史書『タツジュ・ウツ・テヴァーリフ』の中でも、バヤズイット二世の宰相として現れ、⁽⁴⁶⁾ 回曆八八七年から三年ほど宰相を勤め、その後没したとあるにとどまる。一七世紀のコジャ・ヒュセインの史書『バダーイー・ウル・ヴェカーイー』も、ほぼこれと同じことを述べている。⁽⁴⁷⁾

一八世紀前半に成立したベリー・イスマイルの『ギュルデステー・イ・リヤーズ・イルファン』においても、ニシ

ヤンジュ等を勤めた後八八七年に宰相となり、職を辞した後、回曆八九〇年に没し、ブルサのエミール・スルタンに葬られたとある。⁽⁴⁸⁾

一八世紀後半の著作家ヒュセイン・アイヴァンサライーも、そのオスマン朝の有名人の没年と小伝を集めた『ヴェファヤート・セラータイン・ヴェ・メシャーヒリ・リジャール』の中では、宰相となった後、回曆八九〇年に没し、ブルサに葬られたとある。⁽⁴⁹⁾ただ、同じくヒュセイン・アイヴァンサライーの著作であり、人名事典代りとしても後代、極めて広く用いられた、イスタンブルのモスクの総覧である『ハッディカート・ウル・ジェヴァアーミー』の版本の「ジェゼリー・ジャーミー Cezeri Camii (ジェゼリー・モスク)」の項目の中では、デフテルダルとなった後に宰相となったことが述べられた後に、回曆九五〇年に没したと記されている。⁽⁵⁰⁾この項目には、ジェゼリーと同時代のスルトンの名前などにも全く言及がない。

以上のように主要史料を検討してみると、スレイマン大帝在世中の著作から一八世紀後半の著作に至るまで、ジェゼリー・カスム・パシャは、バヤズィット二世の初期の宰相として知られてきたのであり、スレイマン大帝とのかかわりは何人によっても言及されていないことを知るのである。そして、その没年も、回曆八八九年ないし、より一般には八九〇年とされてきていたことも知られる。以上の事情からして、管見の及ぶかぎりでは史料上もやはり、オルホンルの指摘に従い、ジェゼリー・カスム・パシャと、コジャ・カスム・パシャは、全くの別人と考えておく方が適當であると思われる。

ここで、近代の研究者の多くが、「両者を混同した原因について考えると、それは、専ら、スレヤアの『シジツリ・オスマーニー』の記事に由来するものと思われる。スレヤアは、『ハッディカート・ウル・ジェヴァアーミー』の版本

のなかのジェゼリー・カスム・パシヤの没年を回曆九五〇年とする記述を採用し、その没年からおして、ジェゼリーとコジャを同一人物と混同し、「カスム・サーフィー・パシヤ、コジャ、ジェゼリー・サーデ」という項目を書くに到ったのであろう。その際、何故かスレヤーは、詩人列伝類に含まれるジェゼリーの経歴は殆ど採用せず、スレイマンの傳育掛であった人物の経歴と考えられるもののみを記述した。これに対し、スレヤー以後の近代の研究者たちは、スレヤーの記述をそのまま採用したうえで、さらに、詩人列伝などに見られるジェゼリーの経歴をこれにつけ加えていったため、混乱が拡大したのであろう。

以下で、スレヤーを始め従来の研究者の述べてきたところを検討して、コジャ・カスム・パシヤの経歴を追求してみよう。

スレヤーは、回曆九一〇年にアナドル・デフテルダルからルメリ・デフテルダルに転じ、のちセリム一世の王子時代にデフテルダルとして仕えたのち、バヤズイット二世とセリムの抗争の起った時には、シリストレ知事となっていたとする。近代の研究者もほぼこれに従っている。確かに、回曆九〇九年附の宮廷の下賜品等の支出簿によると、アナドル・デフテルダルとして、メヴラーナ・カスム・チェレビイ *Mevlana Kasım Celabi* なる人物が在任し、同年シエツヴァル月一六日になって、ルメリ・デフテルダル昇進に伴ない下賜品を賜っている。回曆九一四年附ヴァクフ文書にもカスム・ビン・イサ *Kasım b. İsa* の名がルメリ・デフテルダルとして見える。⁽⁵³⁾ また、この前後の時期の文書から、この人物は、クヴァーメッティン *Kıvamedin* の別称をもって呼ばれたことが知れる。このクヴァーメッティン・カスムは回曆九一七年ラマザン月に至るまで、ルメリ・デフテルダルとして文書に屢々現われ、翌九一八年レビー・エル・エツヴェル月に、ピリー・メフメット・パシヤの項で既に言及した、退位させられたバヤズイット二

世に随行したデフテルダル・カスム・チェレビイ(ないしパシヤ)と同一人物であった可能性が極めて強い。とすれば、回曆九一〇年代にルメリ・デフテルダルであったカスムは、バヤズィット二世の治世の終りに至るまで、その職に止まったこととなり、バヤズィット二世の末年にシリストレの知事であった人物は別人ということとなる。

そこで、バヤズィット二世の末年にシリストレのサンジャク・ベイであった人物について検討すると、この人物は、かつてバヤズィット二世の王子の一人アフメット Ahmed のララを勤めていたが、父王に対し反抗を企てるアフメットを御し得ず逃亡し、九一七年中にシリストレのサンジャク・ベイに任ぜられた人物で、ルメリ・デフテルダルのカスムとは全くの別人であることが判明する。

ここで、王子スレイマンのララであったカスムについて検討を加えてみると、回曆九一九年ムハッレム、サーフェル、レビー・エル・エツヴェルの第一四半期の三ヶ月に関する王子スレイマンの小宮廷の俸給簿に、ムテフェリカ Muteferrika として、メフメット・ヴェレディ・ビラーデリ・パシヤ Mehmed Veled-i Birader-i Kasım Paşa (パシヤの兄弟の子メフメット) の記載がある。⁽⁵⁷⁾ 王子の小宮廷で単に「パシヤ」といえば、通例、ララ・パシヤをさすものと考えられるから、このメフメットは、当時の王子スレイマンのララの甥であったと見てよいであろう。ところで、いま一つ王子スレイマンの小宮廷の俸給簿が刊行されており、そこには、やはりムテフェリカとして、メフメット・チェレビイ・ヴェレディ・ビラーデリ・カスム・パシヤ Mehmed Celebi Veled-i Birader-i Kasım Paşa なる人物が記載され、先のメフメットと同じく二五アクチェの俸給を受けている。⁽⁵⁸⁾ このことから、先のメフメットとこのメフメット・チェレビイは同一人で、王子スレイマンのララであるカスム・パシヤの甥であったと見ることができよう。とすれば、カスム・パシヤは、少なくとも回曆九一九年初頭には、王子スレイマンのララの地位にあったと考えられ

る。ただ、このララの地位にあるカスム・パシヤの前歴について史料は何も言及しておらず、先の二人のカスムと同一人なのか、それらとも別人なのかは今のところ確定しえない。

王子スレイマンのララ、カスムについては、ハイダルの『セリム一世日録』回曆九二二年ジェマージー・ウル・アフル月一八日及び同年レジェプ月一〇日・一二日の記事にもララとして現われている。

その後のコジャ・カスムの動向は一時、不明となるが、おそらくは回曆九二六年にスレイマン大帝が即位するまでララの地位に止まり、同年中に宰相に任ぜられ、第三節で既に見たように翌九二七年に、引退したのである。引退後は、セラニキを与えられ、これを有している間に没したとペチエヴィーは言う。

以上の如く、スレイマン大帝によって任命された最初の宰相と目されるコジャ・カスム・パシヤの経歴については、従来の研究者の間に混乱があったためもあり、王子時代ララを勤め、即位後に宰相となったという点についてのみ確認し得るにとどまる。

② ハーイン・アフメット・パシヤ

征服後、時経ぬエジプトに独立政権を樹立しようと企てオスマン朝に反旗をひるがえし、「ハーイン Hain (叛逆者)」の異名を得ることとなったアフメット・パシヤについては、ペチエヴィーが宰相列伝のなかで、アルバニア系で宮廷から出てイェニチェリ・アースイとなり、後にルメリ・ベイレルベイスイから宰相に任ぜられたと述べており、スレヤーもほぼこれを踏襲している。

近代の研究者としては、旧版イスラム百科辞典の項目及びそのトルコ語訳の中で、クレマン・ユアールが、アルバニア系で、ルメリ・ベイレルベイスイから宰相に進んだと述べ、新版イスラム百科辞典の項目では、ハリル・イナル

ズク教授が、小姓出身で、西暦一五一六—一七年の対マムルーク朝遠征にビュルク・ミーリ・アフル Büyük Mir-i Ahur として加わり、後ルメリ・ベイレルベイスイを経て宰相となったと述べているにとどまる。

ここで諸史を検するに、ホジャ・サーデッティンの『セリム・ナーメ』のなかに、ミーリ・アフル、アフメット・アー Ahmed Aga なる人物が登場し、後に宰相となったと記されている。⁽⁶⁷⁾ サードッティンのセリム・ナーメは、セリム一世に直接仕えた、サーデッティンの父ハサン・ジャン Hasan Can の回想に依るところが多く、⁽⁶⁸⁾ ハーイン・アフメットがミーリ・アフルの職を経験したという点は、信じてよからう。『セリム・ナーメ』のこの箇所は、イランから来朝した、医者として名高いアフメット・シャー・キャズヴィーニー Mehmed Şah Kazvini に関する逸話の部分で、年代が明かでない。

しかし、フェリドゥン・ベイの『ミュンシャート』のセリム一世の日録の回曆九二〇年レジェプ月一〇日の条に、ミーリ・アフル・クーチェク Mir-i Ahur-u Küçek (小ミーリ・アフルすなわち第二厩番長) からバシユ・カプジュバシユ (首席門衛長) に転じ、⁽⁶⁹⁾ 同年ラマザン月六日に、この職から、さらに転じて第一及び第二ミーリ・アフル職を併せ与えられたアフメット・アーなる人物が見える。この人物は、回曆九二三年まで在職しており、ハーイン・アフメット・パシヤと同一人物であったと考えられる。カプジュ・バシユ、ミーリ・アフルの職はほぼ専ら内廷出身者が任ぜられる職であったから、アフメットは、ペチエヴィーの述べるように、内廷で訓育をうけたのち、外廷に出、カプジュ・バシユから、第一ミーリ・アフルに任ぜられたのであろう。スレヤーが、宮廷から、イエニチエリ・アースイ職をもって転出したとしているのは、従って誤りであろう。

アフメットは、九二三年ラマザン月まで、ミーリ・アフルとして在職し、同月一五日に、セリム一世の怒りを受

けて職を免ぜられて⁽⁷¹⁾いる。その後のアフメットの動静は、回曆九二六年にルメリ・ベイルベイスイに任ぜられるまで、史料に現われない。セリム一世は、屢々、突発的な怒りから、免官を命じ、まもなく旧に復することがあったが、第一ミリー・アフル職は、この時は、翌シェツヴァル月一七日に、第二ミリー・アフルであったイスケンデル・ア
ー Iskender Ağa に与えられ、イスケンデルは、回曆九二四年サーフェル月二四日にカスタモヌ・サンジャク・ベ
イスイに転出するまで同職にとどまっているから、直ちに復職したとは考えられない。⁽⁷²⁾

ペチエヴィーは、イエニチェリ・アースイとなったことがあるとし、スレヤーもこれに従っているが、イエニチェ
リ・アースイとしては、回曆九一九年に既に在任していたアヤス・アー Avas Ağa (後の大宰相アヤス・パシャ)
が少なくとも回曆九二三年ムハツレム月初め頃までは確実に在任している。⁽⁷⁴⁾その後、イエニチェリ・アースイ在任者
の名前は史料に現われなくなり、回曆九二五年ムハツレム月に、これも氏名不詳のイエニチェリ・アースイが、カス
タモヌのサンジャク・ベイに任ぜられ、代ってイエディ・クレ・ディズダール Yedi Kule Dizdar のケマル・アー
Kenal Ağa が、イエニチェリ・アースイに任ぜられたとの記事が史料に見える。⁽⁷⁵⁾このケマル・アーは、スレイマン
大帝の即位時にもなおイエニチェリ・アースイとして在任していたことが知られている。⁽⁷⁶⁾

とすれば、アフメットが、イエニチェリ・アースイたり得る期間は回曆九二三年ラマザン月一五日に、ミリー・ア
フルを免ぜられてから、ケマル・アーがイエニチェリ・アースイに就任する九二五年ムハツレム月までの期間に限
られる。しかし、この一年余の期間についても、史料によってアフメットのイエニチェリ・アースイ就任の事実を確
認することを得ない。アフメットの経歴について、再び史料によって確認し得るのは、回曆九二六年に、ルメリ・ベ
イルベイスイに任じられた時点からである。⁽⁷⁷⁾それゆえ、実際には、アフメットの経歴については、回曆九二三年ラ

マザン月一五日から、九二六年のルメリ・ベイレルベイスイ就任まで不明の時期が残されている。

ルメリ・ベイレルベイスイ就任後は、第三節で既に述べたように、おそらくは九二七年中に、コジャ・カスム・パシヤの後任として宰相に任ぜられ、大宰相への昇進をめざしたもののイブラヒム・パシヤの大宰相就任によって志を上げ得ず、九二九年ラマザン月六日に、ムスル・ベイレルベイスイに転じ、反乱を企てるも失敗し、回曆九三〇年に処刑された。

③ イブラヒム・パシヤ

スレイマン大帝自身の任命した最初の宰相であるイブラヒム・パシヤは、スレイマン時代の最も重要な宰相であるとともに、極めて例外的な経歴の持主でもあった。

イブラヒム・パシヤの出自については、アルバニア系、ギリシア系、さらにはイタリア系等とする諸説があつて定かたなく、オスマン朝に属することとなった事情についても、諸説があつてはつきりしない。⁽⁷⁸⁾しかし、いずれにせよ異教徒出身で改宗してムスリム化された奴隸として、若年より王子時代のスレイマンに仕えていたことは確実である。スレイマンのイブラヒムに対する信任は、この頃からひとかたならぬものがあつたと言われる。⁽⁷⁹⁾スレイマンがセリム一世の死とともに任地マニサからイスタンブルに入って帝位につくと、イブラヒムも内廷に入り、順次内廷の要職に就いたといわれる。⁽⁸⁰⁾『宮廷史』を書いたアタは、この間、バシユ・チュハダール Bas Çuhadar となつたと伝えているが同時代史料によつては確認し得ない。しかし、回曆九二九年までには、内廷にありながら大きな政治的影響力をもちに至り、⁽⁸¹⁾回曆九二九年シャーバン月一三日に大宰相ピリー・メフメット・パシヤが職を免ぜられるや、内廷のオダ・バシユ Odabaşı 兼イチュ・シャーコンジュラル・アースイ İğahincları Agası の職から⁽⁸²⁾極めて異例な抜擢に

よつて、直接大宰相職に任ぜられた。ジェラルル・ザーデ、ルトフィー・パシヤ、ペチエヴィーらはいずれもオダ・バシユとのみ記しているが、これは後代のカラ・チェレビイ・ザーデやソラク・ザーデらが解したように、⁽⁸⁴⁾ スルタンの私室（ハス・オダ Hasoda）に属するイチユ・オウラン（小姓）たちの長であるハス・オダ・バシユ Has Oda Basi の地位にあつたものと解すべきであらう。⁽⁸⁶⁾ ハス・オダ・バシユの地位は、当時の内廷の組織の中では頂点に位する地位であつたと言われるが、⁽⁸⁷⁾ この地位からの大宰相への転出は、極めて異例のことであつた。

イブラヒム・パシヤは、以後、一三年余にわたつてスレイマン大帝の信任をほしいままとして大宰相の地位にとどまり、スレイマン大帝の治世の前半の国政の事実上の担当者として活躍した。このイブラヒム・パシヤは、回曆九四二年ラマザン月二二日に至り、大宰相在任のまま、突然宮廷内で処刑された。

なお、イブラヒム・パシヤは、回曆九二九年に大宰相に任ぜられた際に、ルメリ・ベイレルベイスイも併せ与えられ、その後も、断続的にこの職を兼任した。大宰相がルメリ・ベイレルベイスイ職を兼ねた例は、第七代メフメット二世の大宰相マフムート・パシヤ Mahmud Paşa の例などが見られるが、⁽⁸⁸⁾ 比較的異例のことであり、とりわけスレイマン大帝時代には、ただイブラヒム・パシヤの例があるにとどまる。

イブラヒム・パシヤはまた、回曆九三〇年末から翌九三一年にかけて、ハーイン・アフメット・パシヤの反乱の事後処理のためにエジプトに滞在し大規模な改革にたずさわつたと言われ、一時ムスル・ベイレルベイスイをも兼ねたとされる。⁽⁸⁹⁾ 確かに、アフメット・パシヤの没落後、新たに任ぜられたギュゼルジェ・カスム・パシヤが職を免ぜられた後、イブラヒム・パシヤが、帰京に際しハードゥム・スレイマン・パシヤを任命するまでは、ムスル・ベイレルベイスイ職は空席であつた。しかし、この間大宰相イブラヒム・パシヤが、ムスル・ベイレルベイスイ職をも正式に兼

任していたか否かには疑問がある。

④ アヤス・パシヤ

スレイマン大帝自身の任命した四人目の宰相にして、二人目の大宰相となったアヤス・パシヤは、アルバニア系で、エピルスのアヴロンヤ Avlonya 方面の出身であった⁽⁹⁰⁾。西欧側史料によれば、アヴロンヤ近傍のヒマラ Himara の出身であったという⁽⁹¹⁾。アヤスの父親について見ると、回曆九二九年附のスレイマン大帝の母后ハフサ・スルタン Hafsa Sultan のヴァクフイヒ Vakfiye (宗教寄進財産設立文書) にシャーヒット Şahid (証人) として、アヤズ・パシヤ・ビン・アブドウルハイ Ayas Paşa bin Abdulhay とあり⁽⁹²⁾、九四三年附文書の大宰相のペンチェ Pençe (花押の一種) には、アヤス・パシヤ・イブニ・メフメット Ayas Paşa ibni Mehmed とあり⁽⁹³⁾、バイスン教授によれば、墓碑銘も同じであるというから、その父親は、元来は非ムスリムで後に改宗してムスリムとなりメフメットを名乗ったものと思われる。このことから、アヤス・パシヤは、デウシルメ出身者であったと推定される。アヤスは、内廷に入り⁽⁹⁵⁾、のち外に出た。その際、後代の著作ではあるが内廷関係者の伝承をよく伝えていると考えられるアタの『宮廷史』によれば、セルデンゲチユティ・アースイ Serdengeçü Ağası の職をもつて内廷を出たという⁽⁹⁷⁾。その時期についてもその後の一時期についても経歴に関し史書に記載がないが、ウズンチャルシユルによれば、ブルサのイスラム法廷文書に回曆九一九年ラマザン月には、イェニチェリ・アースイとして現われるという⁽⁹⁸⁾。とすれば、少なくとも九一九年ラマザン月から、今までのところ史料で在任の確認しうる九二三年ムハツレム月六日までは、イェニチェリ・アースイの職にあったこととなる。その後、どの時点でアヤス・アーがイェニチェリ・アースイの職を離れたのか、また何の職に転じたのかは、管見の及ぶところ史料に記述が見あたらない。バイスン教授とパーリー教授はともに、回

曆九二五年（西曆一五一九年）にイエニチェリ・アースイの職を離れたとする⁽¹⁰⁾。バイسنは、ソラク・ザードを根拠として挙げるが、先にハーイン・アフメット・パシヤの項でふれたように『タツジユ・ウツ・テヴァーリフ』と、ムネツジム・バシユにも、回曆九二五年ムハツレム月にイエニチェリ・アースイが交替しケマル・アーが新たに任ぜられたとの記事がある⁽¹¹⁾。しかしいずれの史料も、実は離任した人物の名前を挙げておらず、この人物がアヤス・アーであった確証とはならない。

イエニチェリ・アースイ離任後については、パリーは何もふれず、スレイマンの即位のときまでにはアナドル・ベイレルベイスイに任命されていたと思われるのとどまる。バイسنは、離任後、何に任ぜられたかは定かではないとしつつ、後代の著作『ギェルシエニ・マーリフ』と『シヅリ・オスマーニー』が典拠は示さず一時サンジャク・ペイを勤めたと述べていると伝えるにとどまる。このうち『ギェルシエニ・マーリフ』では、トラブルス・ペイからシヤム・ペイに転じたとしており明かに誤りである⁽¹²⁾。スレヤーの方は、イエニチェリ・アースイから九二五年にカスタモヌ・サンジャク・ベイスイとなったとし、ついで九二六年にアナドル・ベイレルベイスイに転じたとする⁽¹³⁾。スレヤーのこの記事は、ムネツジム・バシユが氏名は挙げぬまま、九二五年にイエニチェリ・アースイであった人物がカスタモヌ・サンジャク・ベイスイに任ぜられたと記しているのに基くものと思われる。おそらくは同じムネツジム・バシユをふまえて、ウズンチャルシユルも、アヤスがカスタモヌのサンジャクペイから、さらにベイレルベイとなったとしているが、これらの主張も、より同時代的な史料によって確認することはできない。ただ、カスタモヌのサンジャク・ペイの官職は、しばしばイエニチェリ・アースイからの任命が見られる特殊のポストであったから、アヤスもまたこのポストに一時就任していた可能性はありうる。

アヤスの経歴が再び明瞭となるのは、回曆九二七年に入ってからであり、このときにはすでにアナドル・ベイレルベイスイ、アヤス・パシャとして現われる。アナドル・ベイレルベイスイ就任までの経歴と、アナドル・ベイレルベイスイ就任の時期については、明確でない。バイスンは、ジェラルル・ザーデを典拠としてスレイマン即位の時期にアナドル・ベイレルベイスイであったことは確実であるとしているが、セリム一世の末年からスレイマンの即位前後についてもジェラルル・ザーデの記述の中にその根拠を見いだすことはできない。

確実であるのは、セリム一世によって新征服地シリア統治のために任命されシヤム・ハーキミ Sam Hakimî となっていたマムルーク出身のジャンベルディ・ガーザリー Canberdi Gazali の反乱の鎮圧に参加し、鎮圧後、回曆九二七年にアナドル・ベイレルベイスイからシヤム・ベイレルベイスイ Sam Beylerkeyisi に転じたことである。⁽¹⁰⁾ シヤム・ベイレルベイスイ任命の日附についてオスマン朝側のジェラルル・ザーデらは言及していないが、シリア側のイブン・トゥールーンは、回曆九二七年レビー・エル・アフル月一五日に、アヤス・パシャの任命が知られたとしている。⁽¹⁰⁾ またのちに、デリ・ヒュスレウ・パシャの項で詳述するが、ボスタンは回曆九二七年サーフェル月一七日にヒュスレウ・パシャがアナドル・ベイレルベイスイに任ぜられたと述べているから、アヤス・パシャはそれ前にアナドルベイレル・ベイスイ職を離れていたであろう。アヤス・パシャの在任期間は短く、同じくイブン・トゥールーンによれば翌九二八年ムハツレム月三日には早くも後任のシヤム・ベイレルベイスイの代理人が到着しているから、⁽¹⁰⁾ 九二七年末には少なくとも離任が決定されていたと考えられる。アヤス・パシャは、その後遅くとも九二八年中にはルメリ・ベイレルベイスイに任ぜられ、⁽¹⁰⁾ ロドス島攻略に参加中、同年ジルカッデ月五日に、免官投獄されたものの翌日には釈放されて復帰し、⁽¹⁰⁾ 回曆九二九年シャーバン月までこの職に在任した。そして同月一三日に、イブラヒム・パ

シャが大宰相となつてルメリ・ベイレルベイスイを兼ねるに及び、日附は明確でないがこの頃、宰相に任ぜられた。その後は、前節で見たように、回曆九三五年シャールバン月一八日に、第三宰相から、物故したチョパン・ムスタフア・パシヤの跡を襲つて第二宰相となり、回曆九四二年ラマザン月二二日に大宰相イブラヒム・パシヤが処刑されるや、第二宰相から大宰相に進んだ。その後、九四六年サーフェル月二六日に病没するまで、大宰相職にとどまつた。

⑤ ギュゼルジェ・カスム・パシヤ

ギュゼルジェ・カスム・パシヤの出自は定かでないが、宗教寄進財産の検地帳の中で、カスム・パシヤ・ビン・アブドゥルハイ Kasım Paşa b. Abdülhay と呼ばれており、⁽¹²⁾ 宮廷に属していたことが知られているから、非ムスリムの父親をもつデウシルメ系の人物であつたのであろう。カスムは、ホジャ・サーデッティンによればバヤズィット二世の近臣であつたといひ、サーデッティン⁽¹³⁾もペチエヴィーも、⁽¹⁴⁾ 内廷に属していたとしている。スメル教授は典拠は示さず、リキヤープ・ヒュマユーン・アールウ Rikâb-ı Humayûn Ağalığı をもつて内廷より外に出たとしているが、⁽¹⁵⁾ これは、おそらくスレヤールの記述⁽¹⁶⁾を採用したものである。スメル教授は、一時チャヴシユ Çavuş (伝令) を勤めたとするが確かでない。⁽¹⁷⁾ 後に詳しくふれるトプカプ宮殿古文書館の一文書の中で確実にカスム・パシヤ自身と断定し得る人物が、カプジュ・パシユであつたとされていることから、カスムが、リキヤープ・ヒュマユーン・アールルの一つ、カプジュ・パシユを勤めたのは確かである。その前後の詳しい経歴は不詳である。

カスムは、セリム一世のシリア・エジプト遠征に従ひ、回曆九二二年レジェプ月二五日以降まもない時期に新たに征服されたハマ Hama のサンジャク・ベイに任ぜられた。⁽¹⁸⁾ 先に言及したトプカプ宮殿古文書館所蔵文書は回曆九二三年ラマザン月頃のオスマン朝のサンジャク・ベイの一覧と推定しうるが、⁽¹⁹⁾ この文書にも、ハマのサンジャク・ベイ

として「カプジュ・バシユ・カスム・ベイ Kapuci-başı Kasım Bey」の名が見え、⁽¹²⁰⁾ 在任中であつたことが知れる。管見の及ぶところ、ハマのサンジャク・ベイとしてのカスムは、回曆九二四年までは史料上確認し得る。⁽¹²¹⁾ その後の一時期のカスムの動静は史料に現われない。スメル教授は、セリム一世の治世の終りまで同地に在任したとするが典拠は示していない。

ユルドゥアイドゥン教授は、自らの校訂したマトラクチュ・ナースフのスレイマン大帝の『イラク遠征宿駅誌』の註の中で、おそらくはボスタンの『スレイマン・ナーメ』に依りつつ、ギゼルジェ・カスム・パシャが、回曆九二七年初頭にハレブのサンジャク・ベイからカラマンのベイレルベイに移り、同年末にカラマン・ベイレルベイスイからアナドル・ベイレルベイスイに転じたとする。⁽¹²²⁾ 確かに、この時期、セリム一世の征服以来九二六年まではハレブ・サンジャクベイスイに在任していたことの確認しうるカラジャ・パシャ Karaca Paşa の異名をもつて知られたアフメット・ベイ Ahmed Bey がその職を離れた状態で九二七年のベオグラード攻略に参加しており、⁽¹²³⁾ 同じく回曆九二六年まで在任の確認できるカラマン・ベイレルベイスイ、ヒュスレウ・パシャ Hüseyev Paşa の同職在任も確認し得なくなる。そして、この両職に他の第三者がこの時期に確実に在任していたことを示す史料も当面見当らないから、ユルドゥアイドゥン教授の記述が正しい可能性はあるが、一抹の不安を残すので、この点は一応言及するにとどめる。

カスムが再び今回利用した史料の上で確認しうる形で現われるのは、アナドル・ベイレルベイスイ、カスム・パシヤとしてである。カスムのアナドル・ベイレルベイスイ任命の時期は史料により確認することを得ないが、回曆九二七年初頭にアヤス・パシヤがシャム・ベイレルベイスイに転じ、のちにヒュスレウ・パシヤの項でみるように、デリ・ヒュスレウ・パシヤが同年サーフェル月一七日にこの職につき、翌回曆九二八年ムハツレム月二四日以降にディ

ヤルバクル・ベイレルベイスイに転じたものと見られるから、カスム・パシヤはその後任であったと見るべきであろう。カスム・パシヤは、九二八年から九二九年にかけて、同職に在任していたことを確認し得る。⁽¹²⁸⁾

回曆九二九年に、ギユゼルジェ・カスム・パシヤは、アナドル・ベイレルベイスイから、チヨバン・ムスタファ・パシヤの後任として、ムスル・ベイレルベイスイに転じたが、間もなくハーイン・アフメット・パシヤがこれにとつて代り、その在任期間は極めて短期間の三〇数日に終つた。⁽¹²⁹⁾ハーイン・アフメット・パシヤの反乱鎮圧後、カスム・パシヤは、回曆九三〇年に再びムスル・ベイレルベイスイに任ぜられたが、翌九三一年初頭には再び職を免ぜられた。⁽¹³⁰⁾

その後のカスム・パシヤについてスメル教授は、『ルステム・パシヤ史』の一写本に依りつつ、イスタンブル帰京後に、カプダン Kapudan (おそらくは「大提督」) に任ぜられ、西曆一五二六年のハンガリー遠征(回曆九三二年レジェプ月より回曆九三三年サーフェル月まで)の間は、イスタンブル守護を命ぜられ、この遠征終了後にルメリ・ベイレルベイスイに任ぜられたとする。⁽¹³¹⁾このうち、回曆九三三年中にルメリ・ベイレルベイスイに任ぜられたという点については、ギョクビルギン教授及びメティン・クント教授によって各々公刊されたトプカプ宮殿古文書館所蔵のD一〇〇五七号文書およびD五二四六号文書によって確認し得る。両文書は、回曆九三二年ジルヒツジェ月一五日以降、九三三年ラマザン月八日以前のオスマン朝のサンジャク・ベイの一覧からなるが、D一〇〇五七号文書では、ルメリ・ベイレルベイスイが大宰相イブラヒム・パシヤであるのに対し、⁽¹³²⁾D五二四六号文書では、カスム・パシヤとなっている。⁽¹³³⁾ギユゼルジェ・カスム・パシヤはすでに前項でみたようにその後回曆九三五年まで同職に在任していたと見られるから、少なくとも、九三二年ジルヒツジェ月一五日以降、九三三年ラマザン月八日以前にルメリ・ベイレルベイスイとなっていたと考えてよからう。

ここで、カスム・パシヤのカプダン就任の点であるが、スメル教授は『ルステム・パシヤ史』の一写本を典拠として挙げているが、少なくともフォーラーの独訳の『ルステム・パシヤ史』には該当する箇所が見当たらない。またこの点について今回使用した諸史料にも該当する記事が見られない。カプダヌ・デルヤー（大提督）についてのキャーティプ・チェレビイらの後代の編纂にかかる列伝類にも、この点の記述がない。これらの点から、カスム・パシヤのカプダン就任は疑しいものと見ておきたい。

ルメリ・ベイレルベイスイ就任後のカスム・パシヤは、回曆九三五年シャーバン月一八日に、すでに前節で述べたように宰相に任ぜられた。ギェゼルジェ・カスム・パシヤは、九四二年まで宰相の地位を保ち第二宰相にまで昇ったが、この年宰相の職を解かれ、のちに、モレのサンジャクを与えられた⁽¹³⁾。ルトフィー・パシヤによれば、回曆九四八年には、この職からも引退したようである。その没年については、スメル教授は、アターイーを引いて回曆九五四年になお存命中であった可能性があると述べているが、回曆九五三年に作製されたイスタンブルのヴァクフの検地帳で、故人として扱われているから、九五三年以前に没していたと考えられる⁽¹⁴⁾。

⑥ プラク・ムスタファ・パシヤ

ムスタファ・パシヤの仇名(ラカーブ Lakab)については、前節でも述べたようにプラク Pulaq の他に、ポラク Polak、バラク Palak、ヤヌラク Yajlak、ヤバラク Yabalak などにはチヌプラク Ciplak などさまざまな読み方、書き方で表記されていて一定せず⁽¹⁵⁾。ペチエヴィーものべているように、その意味も判然としない。ここでは、ペチエヴィーに従い、これをプラクと読んでおく。プラクとすれば、スレーヤーがアルバニア語で「老人」との意であると指摘しているが、たしかにアルバニア語でプラク Pulaq は「老人」との意を有しており、意味も判然とするかに思われ

る。ただこのことは、ペチエヴィーらが、ムスタファを、ボスニア系としているのとやや矛盾してくる点に問題を残す。⁽¹²⁾

いずれにせよ、プラク・ムスタファ・パシヤは、ボスニア系あるいは、史料的にはより弱いアルパニア系の、おそらくはデウシメル出身者で、内廷で訓育を受けた人物であつて見てよからう。⁽¹³⁾ スレヤーは、内廷から転出してヤンヤ Yanya のベイ Bey となり、ついでロドス・ベイ Rodos Beyi となったとしている。⁽¹⁴⁾ たしかにフェリドゥン・ベイの『ミュンシャート』のセリム一世日録の回曆九二〇年ジェーマージー・ウル・アフル月七日の記事には、ヤンヤのサンジャク・ベイとしてムスタファ・ベイの名が見えるが、⁽¹⁵⁾ この人物がプラク・ムスタファと同一人物と見るべき決め手を欠く。他の諸史料にも、ヤンヤ・ベイ就任の記事は見られない。ロドス・ベイとなつたとのスレヤーの記事は、スレヤーの考えている在任時期は九二六年以前とみられ、この時期には実はロドス島は未だオスマン領に編入されていなかったのであるから誤りと思われる。

内廷を出た後に、プラク・ムスタファが、再び明確な形で史料に現われるのは、回曆九二八年にカプダン Kapudan (大提督) としてロドス攻略に参加した時点においてである。⁽¹⁶⁾ カプダン任命の時期は同時代史料に見えない。ただ、九二六年にセリム一世時代以来のカプダン、ジャーフェル・アーが処刑されており、⁽¹⁷⁾ 後代の大提督列伝『ハリター・イ・カプダーヌ・デルヤー』がプラク・ムスタファ・パシヤをその後任として挙げ、スレヤー、ダニシユメンドらも従つており、⁽¹⁸⁾ 一応これを採用しておく。但し、同書に、プラク・ムスタファ・パシヤがその後、九四〇年に没するまで在任し、ケマンケシユ・アフメット・ベイがこれを継いだとあるのは明かに誤りであり、スレイマン大帝日録にあるように回曆九二九年ムハッレム月二七日に、一旦カプダンの地位を免ぜられたとするのが正しかろう。後任は、ア

ヴロンヤのサンジャク・ベイ、ベフラム・ベイ Behram Bey であつた。⁽¹⁵¹⁾ カプダン免官後のプラク・ムスタファについて、キヤーティプ・チエレビイは、『トゥフフェット・ウル・キバル』のなかで、エジプトに行ったとして⁽¹⁵²⁾いるが、これは、この年にハウル・ベイの跡にムスル・ベイレルベイスイとしてエジプトに赴いたチョバン・ムスタファ・パシヤとの混同と思われる。他の史料からは、カプダン離任後のプラク・ムスタファの動静は不明である。しかし、ボスタンの『スレイマン・ナーメ』に依拠してユルドウアイドゥン教授が、プラク・ムスタファが、その後、アヴロンヤ・ベイからカプダンに再任されたとして⁽¹⁵³⁾いるところから見ると、ベフラム・ベイのカプダン就任後、空席となつたアヴロンヤ・ベイとなつた可能性はありうる。

ボスタンによれば、回曆九三三年にカプダンに再任されたプラク・ムスタファは、九三五年までこの職にとどまつたといふ。⁽¹⁵⁴⁾ 九三三年中にはカプダンとなつていたといふことは、九三二年ジルヒッジエ月一五日以降、九三三年ラマザン八日までの間の状態を誌したものであることの確実なトプカプ宮殿古文書館D五二四六号文書に、カプダンに与えられるのが例であつたゲリボルのサンジャク・ベイとして「プラク・ムスタファ」の名が挙げられていることを見ても確かである。⁽¹⁵⁵⁾

ボスタンによれば、ムスタファは、その後、九三五年にカプダンから、ルム・ベイレルベイスイ Rum Beyler-beysi に⁽¹⁵⁶⁾転じ、ついでさらに翌九三六年にシャム・ベイレルベイスイに⁽¹⁵⁷⁾転じたといふ。ルム・ベイレルベイスイ就任の点は、他史料により確認できないが、シャム・ベイレルベイスイ就任については、シリア側のイブン・トゥールーン、イブン・ジュマアらとともに、ムスタファ・アブラク Mustafa Ablag ならしむスタファ・パシヤ・アブラク Mustafa Paşa Ablag なる人物の来任を記録している。⁽¹⁵⁸⁾ ただ就任時期については、イブン・トゥールーンは、回曆

九三七年ジルカッデ月一四日に新総督がタマスカスに到着したとし、イブン・ジュマアは、九三八年に任命されたと書いており、ボスタンと喰い違う。このことは、ムスタファ・パシャのシャム・ベイレルベイスイ離任の時期についても見られ、ボスタンは、九三八年にシャムからカラマンのベイレルベイに移ったとしているのに対し、イブン・トゥールーンは九四〇年、イブン・ジュマアは九三九年としており一致しない。この点については、今のところ他史料によって十分検討しえていないので、後日の検討に委ねたい。

プラク・ムスタファ・パシャのその後についても、なお一時期はボスタンにのみ記述があるが、ユルドゥアイドゥンの紹介するところによれば、カラマン・ベイレルベイスイに転じたムスタファは、九四〇年にここからアナドル・ベイレルベイスイに移り、ついで九四二年に、ルメリ・ベイレルベイスイとなった。スレヤーに、シャム・ベイレルベイスイを九三八年に免ぜられてからムスルに赴き引退して九四〇年に没したとあるのは、前節でも述べたように誤りである。

そして、おそらくは九四二年に、イブラヒム・パシャの没落後、宰相を免ぜられたギュゼルジェ・カスム・パシャの後任として、プラク・ムスタファ・パシャが宰相に任ぜられた。その後、第二宰相にまで昇ったムスタファ・パシャは宰相在任中の回曆九四五年ムハッレム月に没した。その後任として宰相に任ぜられたのが、ルトフィー・パシャであったと見られる。

⑦ ルトフィー・パシャ

ルトフィー・パシャについて、ギョクビルギン教授はムスタファ・アリがアルバニア系であるとしているとのべている。後代の『ハッデイカート・ウル・ヴェゼラー』とアタの『宮廷史』もこれに従い、近代の諸家もこの点では一

致している。ルトファイーには著作がいくつかあり、その一つ『アサーフ・ナーメ』の中で自らをルトファイー・パシヤ・イブン・アブドゥルムーイン Lütfi Paşa İbn Abdülmünin と呼んでいることからも非ムスリムの父をもつものと考えられ、アルバニア系のデウシルメ出身者であったと見られる。ルトファイー・パシヤ自らの語るところから、ルトファイーもまたはじめ内廷に属し、セリム一世の即位後回曆九一八年サーフェル月七日に内廷のチュハダール職から日給五〇アクチェのムテフェリカ Mütferika として外廷に出たことが知られる。その後外廷の要職であるチャシユニギル・バシユ Casnigirbası、カプジュ・バシユ、ミーリ・アーレム Mir-i Âlem を歴任したと自ら述べている。ミーリ・アーレムの職には少なくとも回曆九二〇年レジェプ月一日から九二四年レビー・エル・エツヴェル月一日までの間は他の人物が存在していたことが確認し得るから、ルトファイーのミーリ・アーレム就任は九二四年レビー・エル・エツヴェル月以降のことであつたのであろう。その後の経歴について、ルトファイー・パシヤは、『アサーフ・ナーメ』のなかで、「その後にカスタモヌ・サンジャウ、その後カラマン・ベイレルベイリイ、それから宰相位を賜った。」と述べるにとどまるが、ペチエヴィーは、「いくつかのサンジャク、とりわけヤンヤ・サンジャウを長期にわたって領し、のちバイレルベイとなり」と述べており、ルトファイー・パシヤ自身の述べる略歴にはかなりの省略のあることが知れる。

ギョクビルギン教授は、ルトファイーがセリム一世の厚い信任を受けていたことを証拠に、セリム一世在世中は都にとどまり、スレイマンの即位とともに、自身の言及のあるカスタモヌのサンジャク・ベイに出たのではないかと推定しているが、これを否定する史料もなく、十分あり得ることと思われる。ルトファイーのその後の経歴についてははっきりはしないが、前にも引用したトプカプ宮殿古文書館D五二四六号文書のアイドゥン・サンジャウ Aydn San-

cağı の項に、そのサンジャク・ベイとして、「ルトフィー・ベイ、エミール・アーレム Lütfi Bey Emir-i Alem」⁽¹⁰⁾とあり、これが後年のルトフィー・パシヤかと推定される。この推定が正しいとすれば、ルトフィー・パシヤは回曆九三二年末から回曆九三三年ラマザン月八日までの間の一時期、アイドゥンのサンジャク・ベイであったこととなる。ここでD五二四六号文書より、やや後、おそらくは回曆九三四年から九三五年の間に作成されたものと見られる同じトプカプ宮殿古文書館所蔵のD八八〇三号文書を見るに、ヤンヤのサンジャク・ベイとしてルトフィー・ベイなる人物が存在している⁽¹⁰⁾。D五二四六号文書ではヤンヤのサンジャク・ベイは、メフメット・ベイ Mehmed Bey となっており、このルトフィー・ベイは、回曆九三三年ラマザン月八日以降にヤンヤに赴任した可能性が強い。フェリドゥン・ベイの『ミュンシャート』のスレイマン大帝日録の回曆九三六年サーフェル月八日の条にも、ヤンヤのサンジャク・ベイとして、ルトフィー・ベイの名が見える⁽¹⁰⁾。前職や仇名などの附記がないので、この両者が同一人であると確実に断定することはできないが、同一人とみてよいかと思われる。とすれば、長期にわたりヤンヤのサンジャク・ベイを勤めたとのペチエヴィーの記述と考えあわせると、ルトフィー・パシヤが回曆九三四―五年頃にもヤンヤに在任していたと考えてよからう。そして、いま一つ推測をあげれば、九三三年ラマザン月八日以前にアイドゥンに在任し、ついでヤンヤに移ったと考えるのではあるまいか。

その後のルトフィー・パシヤについては、また一時足跡が途絶えるが、ボスタンによれば、回曆九四〇年にアナドル・バイレルベイスイに転じたブラク・ムスタファ・パシヤの後任としてカラマン・バイレルベイスイに任ぜられたようである⁽¹⁰⁾。前職についてボスタンは単に「ウメラ・イ・デヴレットテン Umera-i Devletan」としており、おそらくサンジャク・ベイからバイレルベイスイに進んだかと推測しうるにとどまる。ルトフィー・パシヤ自身も、回曆九

四一年にカラマン・バイレルベイスイに在任したと述べているから、ユルドゥアイドゥンの伝えるボスタンの記事はこの限りでは信じてよからう。

スレーヤーはルトフィー・パシヤがシャム・バイレルベイスイにもなったとし、ルトフィー・パシヤの『アサーフ・ナーメ』を校訂・翻訳したルドルフ・チュディ Rudolf Tschudi も、スレーヤーに従っているが、これは、既にフウト・キョプリユリユが疑問を呈し、ギョクビルギン教授が断定しているように、同名異人のとり違えである。

カラマン・バイレルベイスイから宰相に就任するまでのルトフィー・パシヤの経歴についても、不明確な点が多い。ウズンチャルシユル教授は、カラマン・バイレルベイスイからアナドル・バイレルベイスイに転じ九四一年に宰相に列したとするが、九四一年に宰相に列したというのは、おそらくスレーヤーに従ったもので誤りと思われる。アナドル・バイレルベイスイを經由したとの点では、ギョクビルギン教授も、一時アナドル・バイレルベイスイとなり、のちのムスタファ・パシヤの後任としてルメリ・バイレルベイスイに進み、まもなく宰相に列したとする。確かに『アサーフ・ナーメ』のイスタンブル版及びチュディ版の校訂に用いられた一写本には、「カラマン・バイレルベイスイ、そしてアナドル・バイレルベイスイ、その後宰相となり」とある。

ここで、ルトフィー・パシヤが、前述のように回曆九四一年にカラマン・バイレルベイスイとして在任していたことは確実であり、また前節でみたように九四三年中には宰相に列したことも疑いはない。とすれば、ルトフィー・パシヤがアナドル・バイレルベイスイたりえた時期は、九四一年から九四三年の間にしぼられる。

さらに、ハンメルがフェルデイー（実はボスタン）を典拠に、大宰相イブラヒム・パシヤの没落後まもなく、おそらくは九四二年中にブラク・ムスタファ・パシヤが宰相に転じ、その後任としてルトフィー・パシヤがルメリ・バイ

レルベイスイとなったと述べているのが正しいとすれば、アナドル・ベイレルベイスイ職に在任可能であった時期は、九四一年から九四二年に限られることとなる。

この間のアナドル・ベイレルベイスイ在任者につき検討すると、前項で述べたようにポスタンを信ずれば、九四〇年から九四二年までは、ブラク・ムスタファ・パシヤが在任していた。そして、フェルデー（実はポスタン）に依拠するハンメルによれば、九四二年ムハッレム月二二日にブラク・ムスタファ・パシヤはルメリ・ベイレルベイスイに転じ、その後任には、ムスル・ベイレルベイスイ職を離れて遠征に参加したハードゥム・スレイマン・パシヤが任ぜられたという。⁽¹⁹⁵⁾ 確かに『イラク遠征宿駅誌』にも、同年ジエマージー・ウル・アフル月下旬にあたる時期に、アナドル・ベイレルベイスイとしてハードゥム・スレイマン・パシヤが在任していたことが記されている。⁽¹⁹⁶⁾ ルトフィー・パシヤ自身も、九四三年の条に、スレイマン・パシヤがアナドル・ベイレルベイスイから一時宰相とされ、ついで宰相位をもつベイレルベイスイとしてムスルに送られたと述べている。⁽¹⁹⁵⁾ ルトフィー・パシヤはスレイマン・パシヤのアナドル・ベイレルベイスイ就任の時期についても述べていないが、その時期は九四二年末以降、おそらくは九四三年のことと思われる。後任については、ポスタンに依拠するユルドゥアイドゥンは、ディヤルバクル・ベイレルベイスイ、メフメット・パシヤであったと述べている。⁽¹⁹⁶⁾

これらの情報を信ずるとすれば、ルトフィー・パシヤがカラマン・ベイレルベイスイの次に、アナドル・ベイレルベイスイとなりえた可能性は少なくとも九四一年から九四二年の間にはありえなかつたこととなる。しかし、『アサーフ・ナーメ』のいくつかの写本にアナドル・ベイレルベイスイ在任の記事があるところを見ると、これ以外の時期にこの職についたのであるうか。あるいは、上述の情報の主要な源泉となつているポスタンの記述に問題があるので

あろうか。ルトファイ・パシヤのアナドル・ベイレルベイスイ就任の記事自体の方に誤りがあるのであろうか。多くの疑問が残るが、ここでは、上述の論証にもかかわらず、アナドル・ベイレルベイスイ在任の可能性を全面的には否定せずに残しておくこととする。

さて、その後のルトファイ・パシヤについてみると、おそらく九四二年にルメリ・ベイレルベイスイとなり、まもなく、おそらくは九四三年中に、第三宰相に任ぜられたものと思われる。そして、九四六年には第二宰相から大宰相に昇進した。九四八年に大宰相を免ぜられたのちには、ディメトカに蟄居を命ぜられ、全くの隠棲生活に入り、九七〇年に没したものと思われる。

⑧ ソフ・メフメット・パシヤ

ハッジユないしエル・ハッジの異名によっても知られるソフ・メフメット・パシヤは、一〇余年も宰相の地位にあった人物でありながら、少なくとも現在版本となっている諸史料においては、その経歴に関する情報に乏しい。とりわけその前半生の経歴については、ペチエヴィーも何も述べておらず、わずかに後代の編纂物のスレヤーの『シジツリ・オスマーニー』に、「エンデルヌ・ヒュマユン Enderun-u Hümayun (内廷) 出身でウメラー Ümera (サンジャク・ベイときにベイレルベイとサンジャク・ベイを合わせて意味する) となったとあるにとどまる。『シジツリ・オスマーニー』には、かなり誤りがあり、直ちに信ずることは難しいが、スレヤーの誤りは、むしろ細かい官職の補任と特にその年号日附に多く、基本的な出自や出身キャリアについては、かなり正確な場合が多いので、ここでは一応、ソフ・メフメット・パシヤを内廷出身者と見ておく。

諸史料によって確認し得るソフ・メフメット・パシヤの経歴は、ルメリ・ベイレベイスイ就任以降の部分にとどま

る。ルメリ・ベイレルベイスイ就任の時期は、スレヤーは回曆九四一年として⁽²⁰⁾いるが誤りと思われ、ルトフィー・パシヤが宰相となった九四三年以降であったと考えられる。ルメリ・ベイレルベイスイ就任の年についても確定的情報は見あたらない。

その後、すでに前節で見たように、ソフ・メフメット・パシヤは、ルメリ・ベイレルベイスイから回曆九四五年ムハツレム月に第三宰相に任ぜられ、九五〇年代に入り第二宰相に達したものの九五六年に宰相の職を免ぜられた。スレヤーが九五四年にボスナのベイレルベイとなったとしているのは、誤りである。しかし、いまその在任期間を確定しえないが、宰相を免ぜられた後に、ルメリ・ベイレルベイリイに属しながら、辺境の有力なサンジャクとして特別の地位にあったボスナのサンジャク・ベイを勤めたことは、確か⁽²⁰³⁾のようである。

その後、ソフ・メフメット・パシヤはペチエヴィイも記しているように最後に創設後もないブデインのベイレルベイに任ぜられた⁽²⁰⁴⁾。スレヤーはその時期を九五八年としているが、ハンガリーの史家タカツはソフ・メフメット・パシヤのブデイン在任期間を西暦一五五七年二月から八月(回曆九六四年に属する⁽²⁰⁵⁾)としている。メフメット・パシヤは、この短い在任期間のうちに、ブデイン・ベイレルベイスイ在任のままで、ブデインで没した⁽²⁰⁶⁾。

④ ハードゥム・スレイマン・パシヤ

スレイマン・パシヤは、その異名ハードゥム Hadım からわかるように宦官出身であった⁽²⁰⁷⁾。『タツジユ・ウツ・テヴァーリフ』によれば、回曆九二六年にセリム一世の没したとき、内廷でハジネダール・バシユ Hazinedar başı を勤め、のちオダ・バシユに進んだ⁽²⁰⁸⁾という。おそらくは内廷から直接に、回曆九三一年に、シヤム・ベイレルベイスイに任ぜられた。イブン・トゥルーンによれば、スレイマン・パシヤは、新総督として同年レビー・エル・エツヴェル

月一九日にはダマスカスに到着したという。⁽²⁰⁾トルコ語版イスラム百科事典のスレイマン・パシヤの項目論文のなかで、スメル教授は、おそらくは西暦一五二三年(回曆九二九—九三〇年にあたる)に、シャム・ベイレルベイスイに任ぜられたものと思われるとするが、⁽²¹⁾ジェラルル・ザードによると、回曆九三一年レビー・エル・エツヴェル月六日には、なおヒュッレム・パシヤ Hürem Paşa がシャム・ベイレルベイスイとしてダマスカスにあつたというから、スレイマン・パシヤの着任はそれ以降のことであつたであろう。それからいくばくもなく回曆九三一年シャーバン月二二日には、ハードゥム・スレイマン・パシヤは、ハーイン・アフメット・パシヤの反乱の事後処理のためにエジプトに滞在していた大宰相イブラヒム・パシヤによって、ムスル・ベイレルベイスイに任ぜられた。⁽²²⁾スレイマン・パシヤは、一〇年近く在任したのち九四一年にこの職を離れて第一次バクダード遠征に加わつた。後任には、後にスレイマン・パシヤの失脚の原因となつたデリ・ヒュスレウ・パシヤが任命された。⁽²³⁾

バクダード遠征軍に加わつたスレイマン・パシヤは、前項でもふれたようにフェルデー(実はボスタン)に依拠するハンメルによれば、まもなく、ルメリ・ベイレルベイスイに転じたムスタファ・パシヤの後任として、アナドル・ベイレルベイスイに任ぜられたという。ハンメルは、この任命の年月日については確言していないが、西暦一五三五年七月二二日(回曆九四二年ムハツレム月二一日にあたる)の叙任に関連して述べているから、⁽²⁴⁾この時期に属するものとみてよからう。それは、ユルドゥアイドゥンの紹介するボスタンの記述の中で、回曆九四二年にプラク・ムスタファ・パシヤがルメリ・ベイレルベイスイに転じたこととも一致する。⁽²⁵⁾スメル教授は、アナドル・ベイレルベイスイ任命をも、一五三五年七月二二日、すなわち同日のことと解している。⁽²⁶⁾ウズンチャルシュルが回曆九四一年シエツヴァル月(西暦一五三五年五月)のこととしているのは何かの間違いと思われ、⁽²⁷⁾海軍史家フェヴジー・

クルトオウルが、ハンメルを引きつつ、回曆九四一年ムハツレム月のこととしているのも、誤記ないし誤りであろう。⁽²¹⁹⁾
スレイマン・パシヤは、ルトフィー・パシヤによれば、回曆九四三年までアナドル・ベイレルベイスイとして在任し、この年、宰相に進んだのちムスル・ベイレルベイスイとして派遣されたと述べている。⁽²²⁰⁾ このときの宰相任命は、中央の正規のクツベ・ヴェジリーとしての任命としてより、むしろムスル派遣を前提としたハリチュ・ヴェジリー任命に近い性格のものと考えざるべきではないかという点については、前節で既に論じた。

回曆九四三年にムスル・ベイルベイスイに再任されたスレイマン・パシヤは、九四五年ムハツレム月までこの職に在任したのち、⁽²²¹⁾ 後任のダウト・パシヤを迎えて後事を託し、同年ムハツレム月中に艦隊を率いてインド遠征に向った。⁽²²²⁾ 同年中にインドから帰還したスレイマン・パシヤは、前節ですでに述べたように翌九四六年にはイスタンブルに帰り、同年中に、帝国中央の第二宰相に任ぜられた。

その後、回曆九四八年にルトフィー・パシヤが大宰相を免ぜられると大宰相に進み、九五一年ラマザン月二五日に、かつて第一回目のムスル・ベイレルベイスイ在任時の後任者であった宰相デリ・ヒュスレウ・パシヤと争って大宰相職から罷免された。罷免後は、マルカラ Malkara に蟄居したが、回曆九五四年シャーバン月に没した。その訃報は、『ルステム・パシヤ史』によれば、シャーバン月一四日にイスタンブルに伝えられたという。⁽²²³⁾

⑩ ルステム・パシヤ

ルステム・パシヤは、スレイマン大帝の宰相たちのなかで、唯一人、二回にわたって大宰相を勤めた人物であり、その在任期間の合計はイブラヒム・パシヤをしのいでスレイマン時代の最も長期にわたって在職した大宰相となる。この人物は、スレイマン大帝の前期の大宰相イブラヒム・パシヤに対し、ソコル・メフメット・パシヤと共に後期

における最も大きな政治的影響力をもった政治家であった。

ルステム・パシヤの出自については、スレヤーはアルバニア系とするが、ベチエヴィーもアタの『宮廷史』も『ハッディカート・ウル・ヴェゼラー』もクロアチア系とし、トルコ語版イスラム百科事典の項目担当のシナーシー・アルトゥンダー及びシエラフェッティン・トゥラン両教授もクロアチア系説をとっている。⁽²²⁷⁾ただ両教授もウズンチャルシユル教授も指摘するように、ボスニア系との伝承も残されている。⁽²²⁸⁾

ルステムは、アタが述べているようにデウシルメ出身であったことに疑いはないが、その兄弟のシナン・パシヤ Sinan Paşa もまたカプダース・デルヤー Kapudani Derya (大提督) として活躍したことは、古典的なデウシルメ観再検討の一材料たり得よう。

ルステムが内廷に属していた点は疑いないが、アルトゥンダーとトゥランは、まずイエニチエリ軍団の予科的存在というべきアジェミ・オジャウ Acemi Ocağı から宮廷に入ったとする。⁽²³¹⁾しかし典拠が挙げられておらず、ここでは採用を保留しておく。

内廷に入ったのちのルステムについては、一八一―九世紀のオスマン・ザードとアタは共に、内廷から直ちに宰相位を与えられてディヤルバクル・ベイレルベイスィ Dıyarbakır Beylerbeyisi となったとしているが、⁽²³²⁾近代のスレヤーは、リキヤープ・アールウをもって外廷に一旦出たとし、⁽²³³⁾ウズンチャルシユル及び、アルトゥンダーとトゥランは、内廷でシラフタール・シェヒリヤリー Şahdâr-ı Şehriyârî (スルタンの大刀持役) となり、この職から外廷の要職の一つ第一ミリー・アフルとして内廷から出たとする。⁽²³⁴⁾この点について、その時期もまた典拠も何も示されていないが、フェリドゥン・ベイの『ミュンシャート』中のスレイマン日録の九三三年サーフェル月六日の条に、パーデ

イシャー Patisah (大王) のシラフダールであるルステム・アーが、ビユク・ミール・アフル Buyuk Mir-Ahur (すなわち第一ミリー・アフル) に任ぜられたとの記事があり、⁽²³⁵⁾先の指摘はおそらくこれをふまえたものと思われる。日録の記事だけでは、このルステム・アーがのちのルステム・パシャか否か断定しかねるが、ここでは一応、ウズンチャルシユルらに従っておく。

その後のルステムの経歴は史料にもしばらくは現われないが、回曆九四二年に至って、ディヤルバクル・ベイレルベイスイに任ぜられたということが、ボスタンに依拠するユルドゥアイドゥンの註記中の記述から知れる。⁽²³⁶⁾ボスタンは、九四二年ラマザン月二日に失脚した大宰相イブラヒム・パシャ系の人物として免官となったメフメットなる人物の後任としてルステムが任命されたと記しているとのことであるから、これがたざいとすれば、ルステムのディヤルバクル・ベイレルベイスイ就任の時期は、同年ラマザン月二日以降のこととなる。

就任時期については言及がないが、ルステム・パシャがディヤルバクル・ベイレルベイスイ職にあつたことについては、最も同時代に近いジェラル・ザーデらもペチエヴィーも、また後代の諸家も一致して認めている。

その後、ルステム・パシャは回曆九四五年初めころに、ディヤルバクル・ベイレルベイスイから、この時ルメリ・ベイレルベイスイに転じたデリ・ヒユスレウ・パシャの後任としてアナドル・ベイレルベイスイに任ぜられた。⁽²³⁷⁾そして前節で述べたように翌九四六年中には早くも宰相に列し、キャリアのうえでやや先行しているかに見えたデリ・ヒユスレウ・パシャの先をこすに至った。その後は第四宰相から、順次、第三宰相、第二宰相へと昇進し、九五一年ラマザン月二五日に大宰相ハードゥム・スレイマン・パシャが職を免ぜられると、第二宰相から大宰相に昇格した。

のち九六〇年に一旦、王子ムスタファ処刑事件の責任を問われて大宰相を免ぜられたが、スレイマン大帝と有力な

后ヒュッレム・スルタン Hürem Sultan とのあいだの娘をめぐっていたことから、再び九六二年に大宰相に任ぜられ、在任中の九六八年シェッヴァル月二八日に没した。

⑩ デリ・ヒュスレウ・パシヤ

デリ Deli ないしディヴァアーネ Divane (ともに「気の狂った」の意) の異名をもつヒュスレウ・パシヤは、ボスニア系で、一六世紀末の高名な宰相ララ・ムスタファ・パシヤ Lala Mustafa Paşa の兄弟として知られる。⁽²³⁸⁾ その経歴については、既刊の諸史料には欠落がかなり大きい⁽²³⁹⁾ が、バケ・グラモンの研究がこの欠落を埋めている。⁽²⁴⁰⁾

スレヤーは、ヒュスレウを官廷出身とするが、バケ・グラモンが引用するムスタファ・アリもはじめ「ハレミ・サーデット Harem-i-Sadet」にあり、ついでボリュク・ハルク Böyük Halkı に加えられたものの、一時無頼生活に奔り、のち許されて再び官途につき、⁽²⁴¹⁾ 外廷に属するチャシュニギル・バシユそしてカプジュラル・ケトフダスイ Kaptıçlar Kethüdası を歴任したとする。⁽²⁴²⁾ スレヤーの記述も同じである。⁽²⁴³⁾

その後、すでにセリム一世時代に、ハイダル・チエレビイのセリム一世日録等にもあるとおり、回曆九二〇年レヅエプ月三日ないし四日附で、アナドル・ベイレイベイスイに転出したゼイネル・パシヤ Zeynel Paşa に代り、カラマン・ベイレイベイスイとなった。⁽²⁴⁴⁾ ヒュスレウ・パシヤは、スレイマン大帝の治世の初年までこの地位にとどまった。⁽²⁴⁵⁾ 回曆九二七年サーフェル月一七日に至って、アナドル・ベイレルベイスイとなったと、ユルドゥアイドゥンは、ボスタンに依りつつ述べている。⁽²⁴⁶⁾ これが正しいとすれば、その在任期間は、同年アヤス・パシヤがシャム・ベイレイベイスイに転出し、その後ギュゼルジェ・カスム・パシヤがこの職に就くまでの短期間のことであつたと考えられる。バケ・グラモンが、ボスタンに依拠して説くところによれば、ついで、ディヤルバクルの征服者であり、その初代

のベイレイベイでもあったブユクル・メフメット・パシヤが在任中に没したとき、その跡を承けてディヤルバクル・ベイレイベイスイに転じたという。⁽²⁴⁸⁾ブユクル・メフメット・パシヤが没したのは、回曆九二八年ムハツレム月二四日であると言われるから、ヒュスレウ・パシヤのディヤルバクル・ベイレイベイスイ就任は九二八年初頭のことである。ディヤルバクルには、一〇年近い長期にわたって在任したといわれる。⁽²⁴⁹⁾

たしかに、諸史料に徴するに少なくとも回曆九三一年から九三三年の間にも、ヒュスレウ・パシヤがディヤルバクル・ベイレイベイスイとして存在していたことを確認し得る。⁽²⁵⁰⁾バケ・グラモンがボスタんに依拠して説くところによれば、ヒュスレウ・パシヤがディヤルバクル・ベイレルベイスイの地位を失ったのは、西曆一五三一—三二年冬（すなわち回曆九三八年）のことであった。⁽²⁵¹⁾

バケ・グラモンは、同じくボスタんに依拠して、その後西曆一五三二年（回曆九三八・九三九年）中に、ヒュスレウ・パシヤは、アナドル・ベイレイベイスイに再度任じられたとしている。⁽²⁵²⁾管見の及ぶところ諸史料にも、回曆九三六年末にヤークブ・パシヤがアナドル・ベイレイベイスイとして現われたのち、⁽²⁵³⁾回曆九四〇年にスレイマン・パシヤなる人物にかわってプラク・ムスタファ・パシヤが任せられるまでの間の、他のアナドル・ベイレイベイスイ在任者を確認し得ていない。とすれば、九三八年から九四〇年までの間のある期間、ヒュスレウ・パシヤが、アナドル・ベイレルベイスイに在任していた可能性はありうる。

バケ・グラモンも、その後の数年間については、ヒュスレウ・パシヤの足跡を見出しえないという。⁽²⁵⁴⁾確かに、諸史料にもヒュスレウ・パシヤの名は見あたらぬ。ヒュスレウ・パシヤが再び史料に現われるのは、回曆九四〇年のことである。この年、ヒュスレウ・パシヤは、ハレブ Halab（アレツポ）のベイから、シヤム・ベイレイベイスイに

転じている。⁽²⁵⁶⁾バケ・グラモンはそれを九四〇年ジルカッデ月のこととしている。ハンメルにも、回曆九四〇年ジルヒツジエ月一日にすでにシヤム・ベイレイベイスイとしてヒュスレウ・パシャが現われ、⁽²⁵⁷⁾イブン・トゥールーンも、九四〇年末には、この任命が行われたとのべている。⁽²⁵⁸⁾イブン・ジュマアが、その在任期間を九四六年から九四九年としてゐるのは誤りである。⁽²⁵⁹⁾

ヒュスレウ・パシャは、まもなく、翌九四一年には、ハードウム・スレイマン・パシャの後任としてムスル・ベイレルベイスイに任ぜられ、⁽²⁶⁰⁾九四三年に再びハードウム・スレイマン・パシャがムスル・ベイレイベイスイに任ぜられるに及び、ヒュスレウ・パシャはその職を免ぜられた。⁽²⁶¹⁾この在任期間中に、ヒュスレウ・パシャが、前任者ハードウム・スレイマン・パシャの治績を否定しようとしたことが、後年の両者の対立の原因となったと言われる。⁽²⁶²⁾

ムスル・ベイレイベイスイ職を離れたヒュスレウ・パシャは、ボスタンによりつつバケ・グラモンの言うところに従えば、西曆一五三七年初頭（すなわち回曆九四三年後半）に、アナドル・ベイレルベイスイに三たび任ぜられたといふ。⁽²⁶³⁾ジェラルル・ザードによれば、アナドル・ベイレルベイスイ職には、九四五年までとどまったのち、この職から、ヒュスレウ・パシャは、この年のムハッレム月に第三宰相に転じたソフ・メフメット・パシャの後任として、ルメリ・ベイレルベイスイに転じた。バケ・グラモンの引くボスタンも同じ内容を伝えている。⁽²⁶⁴⁾後任のアナドル・ベイレルベイスイは、既に先に述べたように、ルステム・パシャであつた。

デリ・ヒュスレウ・パシャのルメリ・ベイレルベイスイ在任中の九四六年には、彼の後任者であつたルステム・パシャが、ルメリ・ベイレルベイスイをとびこえて宰相に任ぜられた。デリ・ヒュスレウ・パシャは、漸く回曆九四八年ムハッレム月上旬に至つて、第四宰相に任ぜられた。後任のルメリ・ベイレルベイスイは、後の大宰相カラ・アフ

メットであつた。⁽²⁶⁵⁾

ヒユスレウ・パシヤは、既に述べたように、第四宰相のまま、回曆九五一年ラマザン月二五日に、彼のムスル・ベイルベイスイ在任中以来不仲の、時の大宰相ハードウム・スレイマン・パシヤと御前会議の席で争つて職を免ぜられ、まもなく失意のうちに没したという。没年は墓碑銘によれば、回曆九五二年である。⁽²⁶⁶⁾

(四) スレイマン大帝後半期任命の大宰相・宰相たち——回曆九五一年—九七四年——

① カラ・アフメット・パシヤ

カラ・アフメット・パシヤは、ペチエヴィーによればアルバニア系で、内廷出身者であつた。⁽²⁶⁷⁾ デウシルメ出身と思われるが、スレヤーが大宰相ルステム・パシヤの兄弟としてゐるのは誤りである。⁽²⁶⁸⁾ ペチエヴィーによれば、内廷からカプジュ・バシユの職をもつて外廷に出たといふ。⁽²⁶⁹⁾

その後のカラ・アフメットについては、ペチエヴィーは、年号日附は全く示さず、イエニチェリ・アースイからルメリ・ベイルベイスイついで宰相となつたと述べてゐる。⁽²⁷⁰⁾ この経歴の概略については諸家も一致してゐるが、各職の任免の時期、とりわけイエニチェリ・アースイの在任期間について、混乱がみられる。アタは『宮廷史』中の内廷出身の大宰相列伝の中で、カラ・アフメットがセリム一世時代の回曆九二一年にイエニチェリ・アースイとなつたと述べてゐるが、⁽²⁷¹⁾ すでに述べたようにこの時期にはアヤス・パシヤが在任してゐるから明かに誤りである。スレヤーは、九三六年にイエニチェリ・アースイを免ぜられたとしてゐるが他の資料により確認しえない。⁽²⁷²⁾ トルコ語版イスラム百科事典の項目論文を執筆したジャヴィット・バイスン教授は、外廷でミリー・アーレムにまで進んだのちに、回曆九

二七年にイエニチェリ・アースイに任ぜられ、のちルメリ・ベイレルベイスイとなつたとするが、前にも述べたように、回曆九二六年シエツヴァル月一七日にスレイマン大帝が即位したときにはケマル・アアが九二四年以来イエニチェリ・アースイの地位にあり、翌九二七年サーフェル月二九日には、バリ・アア Bali Aga がイエニチェリ・アースイとして現われるから、⁽²³⁾バイスン教授の述べるところも、疑わしい。

ここで、ユルドゥアイドゥンの校訂したマトラクジュ・ナースフの『イラク遠征宿駅誌』には、回曆九四一年にデリ・ヒュスレウ・パシャがムスル・ベイレルベイスイに任ぜられたのとほほ時を同じくして、ハレブ・サンジャウに転出したメフメット・アアにかわつてアフメット・アアなる人物がセリ・ベツヴァービン Seri Bevvabin (すなわちカプジュ・パシユ) からイエニチェリ・アースイとなつたとある。⁽²⁴⁾校訂者のユルドゥアイドゥンは、この人物に註して、おそらくはまたボスタンによりつつ、その後九四七年にルメリ・ベイレルベイスイ、ついで宰相、大宰相に進んだと述べており、この人物がカラ・アフメットであると考えていることがわかる。確かにハンメルもまた、やや年がずれるが同じくフェルデー(すなわちボスタン)に依りつつ、西曆一五四一年五月(すなわち回曆九四八年ムハツレム月)に宰相に転じたデリ・ヒュスレウ・パシャにかわつてアフメットがイエニチェリ・アースイからルメリ・ベイレルベイスイとなつたとする。⁽²⁵⁾これからみて、カラ・アフメット・パシャは、実は回曆九四一年から九四八年初までイエニチェリ・アースイであつたと見るべきであろう。この時期について、他の人物がイエニチェリ・アースイであつたとの記事も、管見の及ぶところ諸史料に見あたらない。

なお、ルトファイ・パシャも九四一年に、アフメット・アアなる人物がイエニチェリ・アースイとなつたとしているが、ルトファイ・パシャはこの人物がスバシユ Subasi からこの職に転じたとしてゐる。⁽²⁶⁾しかし、カラ・アフメツ

トがスバシユからイエニチエリ・アースイとなつたとの記事は他のいずれの史料にも見えないので、ここでは、カプ
ジユ・パシユより転じたものと見ておきたい。

その後、カラ・アフメット・パシヤは、ルメリ・ベイレルベイスイに転じた。ポスタンによるウルドゥアイドゥン
及び、『ルステム・パシヤ史』はその時期を九四七年とし、同じくポスタン（ハンメルはフェルデーと考えてい
る）及び西欧側史料により、ハンメルは九四八年ムハツレム月上旬（おそらくは一三日）のこととしているが、こ
こではハンメルに従つておく。

その後、カラ・アフメット・パシヤは前節で述べたように回曆九五一年ラマザン月に至り、ルメリ・ベイレルベ
イスイより第三宰相に転じ、のち九七〇年シェツヴァル月二七日に、罷免されたルステム・パシヤに代つて大宰相とな
つたが、在任中の九六二年ジルカッデ月一三日に、ルステム・パシヤを再び大宰相としようとするスレイマン大帝に
よつて処刑された。

② ハードゥム・イブラヒム・パシヤ

イブラヒム・パシヤは、その異名ハードゥムが示すように宦官出身であつた。この人物は、ギョクビルギンの引用
する回曆一〇六七年附の検地帳の記載によれば、少なくとも回曆九四七年レジェブ月上旬には、白人系の宦官（ア
ク・アーラル Ak Agalar）の長でかつ当時の全宦官の長でもあり内廷の最有力人物でもあつたバープ・ウツ・サー
デ・アースイ Bab us-Sade Ağası（又の名をカプ・アースイ Kapı Ağası）の職にあつたものとみられる。

その後、ハードゥム・イブラヒムは、内廷から転出したが、ペチエヴィーはその宰相列伝のなかでは直接宰相とな
つたように記し、後代のスレヤーは、アナドル・ベイレルベイスイとして転出し、のち九三九年にルメリ・ベイレル

ベイスイとなつたとして(285)いる。諸史料についてみると、ペチエヴィーの本文によれば少なくとも回曆九五〇年レビ
 ー・エル・エツヴェル月には、ハードゥム・イブラヒム・パシヤは、アナドル・ベイレルベイスイに在任して(286)おり、
 ジェラール・ザードも、同年ジェマージー・ウル・アフル月一九日の条でアナドル・ベイレルベイスイとして挙げ
 ている。(285)このことから、ハードゥム・イブラヒム・パシヤは、内廷のカブ・アースイからペチエヴィーがその宰相列
 伝のなかで述べたように直接に宰相として転出したのではなかつたことが知れる。内廷からアナドル・ベイレルベ
 スイとして転出したか否かについても確証はない。しかし、イブラヒムが内廷で極めて有力な地位にあつたことから、
 アナドル・ベイレルベイスイとして転出したと見てもよいのではないかと思われる。アナドル・ベイレルベイスイ就
 任の時期も不明であるが、九四八年にはスレイマン・パシヤなる人物がこの職にあり、ルトフィー・パシヤを信ずる
 とすればさらにこの年、ヤフヤー・オウル・メフメット・パシヤがこの職に任ぜられたとあるから、イブラヒム・パ
 シヤの就任も少なくとも九四八年以降のことであつたと思われる。

その後、イブラヒム・パシヤは、すでに前節で言及したように、回曆九五一年ラマザン月一三日に、第四宰相に任
 ぜられた。その際、イブラヒム・パシヤは、スレヤーの言うようにルメリ・ベイレルベイスイを経て宰相に任ぜられ
 たのではなく、アナドル・ベイレルベイスイから直接宰相に任ぜられたのであつた。宰相となつたハードゥム・イブ
 ラヒム・パシヤは、第二宰相にまで進んだのちに、九六二年ジルカッデ月頃に引退し、隠棲中の回曆九七〇年ジェマ
 ージー・ウル・アフル月一五日に没した。(288)

③ ハイダル・パシヤ

ハイダル・パシヤもまた宦官出身で、スレイマン大帝時代の三人の宦官出身の宰相たちのうちの第三番目にあたる。

ハイダル・パシヤもカブ・アースイとなったのちに、直接、この地位から内廷を出て、宰相に任ぜられた。この点では、内廷の小姓の長から直接大宰相となったイブラヒム・パシヤと同じく、当時の宰相としては異例の昇進過程を経験した人物であった。スレイマン大帝時代の宰相たちの中で、内廷から他の諸職を経ずいきなり宰相となった人物は、上記の大宰相イブラヒム・パシヤとこの人物の二人だけである。

九五四年に宰相となったとき、ハイダル・パシヤは、前節で論じたようにおそらくは第五宰相に任ぜられたものとみられる。その後、第四宰相に進んだが、大宰相ルステム・パシヤの失脚した九六〇年シェツヴァル月二十七日に、自らも宰相を免ぜられた。免官後、ペチエヴィーは、ヘルセク・サンジャウ *Hersək Sancağı* を与えられたと述べて、スレヤーもこれに従っているが、一六世紀のヘルセクのサンジャク・ベイ就任者に関するポポヴィッツの研究によっても、確認し得ない。⁽²⁸⁷⁾

スレヤーは回曆九七一年ジェマージー・ウル・エツヴェル月一六日に没したとするが、同時代史料によつてはこれを確認し得ない。しかし『年号日附記録集』によれば、回曆九七一年ジェマージー・ウル・アフル月一二日の条に「第四宰相から免官となった故ハイダル・パシヤの訃報が到着した」⁽²⁸⁸⁾

とあるから、スレヤーの記述はこの点では正しいのかもしれない。

④ セミズ・アリ・パシヤ

セミズ・アリ・パシヤは、ペチエヴィーによれば、ヘルセク・サンジャウのブラツザ *Brazza* (ブラチュ *Prage*) 出身であり、大宰相イブラヒム・パシヤのケトフダ *Ketüda* (執事ないし用人と訳せよう) であったチエステ・バリ *Ceste Bali* の親族であることから、内廷に受け入れられた人物であった。⁽²⁸⁹⁾ 同じくペチエヴィーによれば、内廷か

らまずカプジュ・パシユとして外廷に出たのち、イエニチェリ・アースイに転じたという⁽²⁹⁵⁾。この点につき、スレヤーは、九五二年にミリー・アーレムに進みついで九五三年にイエニチェリ・アースイに進んだとする⁽²⁹⁷⁾。トルコ語版イスラム百科事典の項目論文のなかで、ギョクビルギンも、スレヤーを典拠に挙げてこれに従っている⁽²⁹⁸⁾。ウズンチャルシユルは、九五二年に、ミリー・アーレムとして内廷を出、一年後にイエニチェリ・アースイとなつたと典拠は挙げずに述べている⁽²⁹⁹⁾。後代の『ハッディカート・ウル・ヴゼラー』やアタの『宮廷史』は、イエニチェリ・アースイ職をもつて宮廷を出たとする。このあたりのセミズ・アリの経歴は公刊された同時代史料類には記載がなく確認することを得ない。しかし、ペチエヴィーの記述もあり、内廷から外廷の要職のいずれか、おそらく最初はペチエヴィーの挙げるカプジュ・パシユに転出し外廷にしばらくあつたのちに、イエニチェリ・アースイとなつたものと見るべきであろう。イエニチェリ・アースイから、いつ、いかなる職に転じたかについても、同時代史料に明確な記述を欠く。しかし、ペチエヴィーにはルメリ・バイレルベイスイとなつたとあり⁽³⁰⁰⁾、『ハッディカート・ウル・ヴゼラー』から、現代のギョクビルギン教授に至るまで、諸家もこれと見解を同じくしている。ただ、ルメリ・バイレルベイスイ就任の時期については、スレヤーが九五七年とし、『ハッディカート・ウル・ヴゼラー』とアタが九五〇年以前と考えているのみである。後二者については、すでに九五一年までカラ・アフメット・パシヤがルメリ・バイレルベイスイであつたことが明かとなっているから、明確に誤りといえる。

ここで、オメル・ルトフィー・バルカンが校訂刊行した回曆九五四年ムハッレム月一九日から九五五年ムハッレム月末日（財政曆のまる一年にあたる）に関する国庫会計の出納表をみるに、ミリー・ミラーニ・ヴィラーエティ・ルメリ Mir-i mirān-i vilāyet-i Rumeli（すなわちルメリ・バイレルベイスイ）としてアリ・パシヤの名がみえる⁽³⁰²⁾。さ

らに『ルステム・パシヤ史』の記述から、アリ・パシヤが少なくとも回曆九五四年ラマザン月三日にはルメリ・ベイレルベイスイ職についていたことがわかる。⁽³⁰³⁾ここからスレヤーの誤りも明かとなる。ただ、セミズ・アリ・パシヤのルメリ・ベイレルベイスイ就任の時期は現在のところ確定しえない。

セミズ・アリ・パシヤは、ルメリ・ベイレルベイスイから、回曆九五六年にムスル・ベイレルベイスイに転じた。⁽³⁰⁴⁾やや後代のカラ・チェレビイ・サーデによれば、レビー・エル・エツヴェル月のことであったという。⁽³⁰⁵⁾ムスル・ベイレルベイスイの職には九六〇年まで止ったが、この年、大宰相であったカラ・アフメット・パシヤの意向により、当時ハレブにあったドゥカギン・オウル・メフメット・パシヤ Dukagiogiu Mehmed Pasa にその職を与えるべく、アリ・パシヤは職を免ぜられた。⁽³⁰⁶⁾

しかし、まもなく翌九六一年ムハツレム月には第三宰相に任ぜられてスレイマン大帝の東方遠征に加わった。のち第二宰相に進み、回曆九六八年シエツヴァル月二八日に至り、在任中に没したルステム・パシヤに代って大宰相に任ぜられ、在職中の九七二年ジルカッデ月末に没した。

⑤ ソコル・メフメット・パシヤ

その出身地ソコロヴィツツ Sokolovic 村にちなんでソコルルの呼名をもって知られるメフメット・パシヤは、長身であったことから「ターヴィイル Tavi ないしウズン Uzun」の呼名をも有する。ソコルル・メフメット・パシヤは、スレイマン大帝の任命した最後の宰相であり、ルステム・パシヤと並んでスレイマンの治世の後半期を代表する政治家であるとともに、その後も、スレイマン大帝の子で第一一代スルタンとなったセリム二世（在位回曆九七四—九八二年、西曆一五六六—一五七四年）の全治世を通じて大宰相位にあり、さらにスレイマン大帝の孫で第一二代

ムラト三世（在位回曆九八二—一〇〇三年、西曆一五七四—一五九五年）の初期までその地位にとどまり、オスマン史上、最も著名な大宰相の一人となった。

メフメット・パシヤはその仇名の示すように、ボスニアのソコロヴィッツ出身で、ボスニア系キリスト教徒の家族に生まれ、デウシルメにより、オスマン朝の支配層に編入された。その名はバヨ Bayo であつたという。メフメット・パシヤの甥にあたるソコルル・ムスタファ・パシヤ Sokollu Mustafa Paşa の命によりシエフイク・エフェンディ Sifk Efendi によつて書かれた『ジエヴァーヒル・ウル・メナークン Cevahir ul-Menakib』という未刊の著作についてのアブドゥル・ラフマン・シエレフの紹介論文によれば、デウシルメにより選択されたバヨはムスリムに改宗せしめられてメフメットの名を得、初めエディルネ・サラエ Edirne Sarayı（エディルネ宮殿）に配置されたのち、トプカプ宮殿の内廷に採用され、まず内廷でイチュ・ハジネ・オダスイ İc Hazine Odası に属し、のちリキヤードール Rikâdar、チユハダール Cuhadar としてシラフダール Silahdar に進み、ついで外廷に出てセル・チャシユニギル Serçanîgir（チャシユニギル・バシユに同じ）からカプジュラル・ケトゥフダスイとなり、この職から、官廷を完全に離れて、カプダーヌ・デルヤー（大提督）となつた。

ソコルル・メフメットは、西曆一五四六年七月四日（回曆九五三年ジェマージー・ウル・エツヴェル月五日）に没した⁽³⁰⁾アルジェリアの水軍出身でオスマン朝最大の提督であつたバルバロス・ハイレッティン・パシヤ Barbaros Hayreddin Paşa の後任として大提督に就任したが、バルバロスはベイレルベイの位を与えられていたのに対し、ソコルルは当初はゲリボルのサンジャク・ベイの資格をもつてこの職に任ぜられた。漸く翌九五四年ムハッレム月二〇日になつて、ソコルルもベイレルベイの資格をもつ大提督となつた。⁽³¹⁾

ソコルル・メフメット・パシヤは、その後カプダーヌ・デルヤーからルメリ・ベイレルベイスイに転じた。その任命の時期は同時代史料によつては確定し得ない。しかし、同時代史料のジェラルル・ザーデ等には回曆九五八年以降ルメリ・ベイレルベイスイとして現われ、後代の編纂ものではあるが『ヌフベット・ウツ・テヴァアーリフ』や、ムネツジム・バシユ(315)のなかでは九五六年からルメリ・ベイレルベイスイとなつてゐることと、九五六年までは、先のセミズ・アリ・パシヤがルメリ・ベイレルベイスイ職にあつたことを考え合わせれば、典拠は挙げぬものの、トルコ語版イスラム百科事典の項目論文で、ギョクピルギンが回曆九五六年にセミズ・アリ・パシヤの後任としてルメリ・ベイレルベイスイとなつたと述べてゐるのは正しいものと思われる。

ソコルル・メフメット・パシヤは、ルメリ・ベイレルベイスイには回曆九六一年シェツヴァル月二五日までとどまり、宰相に進んだ。後任のルメリ・ベイレルベイスイとしては、次に採り上げるペルテウ・パシヤが、任ぜられた。宰相となつたソコルルは、のちに第三宰相から第二宰相に進み、回曆九七二年ジルカッデ月末に時の大宰相セミズ・アリ・パシヤが没すると、その後任として、第二宰相から大宰相に就任した。ソコルルは、その後、第一二代ムラト三世の時代まで大宰相の地位に止まり、在任中の回曆九八七年に暗殺された。(317)

⑥ ペルテウ・パシヤ

ペルテウ・パシヤ (ペルテウ・メフメット・パシヤ *Pertev Mehmed Paşa*) の経歴については、ペチエヴィーの宰相列伝にも記載を欠き、とりわけその前半生の経歴については、少なくとも現在版本となつてゐる諸史料にも殆ど記述がない。近代の著作としても、古くはスレヤーの『シジリ・オスマーニー』の項目、新しくは、『ヴァクフラル・デルギスィ』の中のアブドゥルカドゥル・エルドーアンの論文(318)及びシエレフェッティン・トゥランによるトルコ

語版イスラム百科事典の項目論文が目につく程度である。

ペルテウ・パシヤの出自について、エルドーンは典拠は示さぬままヘルセク出身とするが、トゥランは、ムスタフ・アりに依りつつ、アルバニア系とする。エルドゥアンは、同じく典拠は示さず、初めペルテウは、スレイマン大帝の前半期の極めて有力な官人であったバシユ・デフテルダルのイスケンデル・チェレビイの奴隸であり、イスケンデル・チェレビイの処刑後、その奴隸たちが国庫に没収された際に内廷に入ったとする。しかし、これは、ムスタフ・アりに記されペチェヴィイも伝えているイスケンデル・チェレビイの在りし日の権勢についての逸話を誤り解したための間違いと思われる。これも典拠は示さぬまま、トゥランが、内廷出身としているのが正しいものと思われる。スレヤーも、単に内廷出身と記すにとどまっている。

その後のペルテウについて、トゥランは、同じく典拠は示さずに内廷から、リキヤブ・ヒユマユーン・アーラルの地位に転出し、一時カプジュ・バシユをつとめたとし、エルドーン、スレヤーはカプジュ・バシユとして内廷を出たとしている。この点について確証は見い出せないが、今は、一応トゥランに従っておく。

トゥランもスレヤーも、共に典拠を示さぬまま、その後外廷を出てイエニチェリ・アースイとなったとする。トゥランは、一二年にわたってこの地位にとどまったと述べている。『年号日附記録集』によれば、ペルテウが、イエニチェリ・アースイから、宰相に昇ったソコルル・メフメット・パシヤの後任としてメルリ・ベイレルベイスイとなつたのは、回曆九六一年シエツヴァル月二五日のことであるから、トゥランのこの記述が正しいとすればペルテウは、回曆九四九年頃から、イエニチェリ・アースイを勤めていたことになる。このことは、今回利用した諸史料からは確証し得ないが、回曆九四八年ムハッレム月一四日に、アリ・アー Ali Aga なる人物が、ミリー・アーレムからイエ

ニチエリ・アースイに任せられたという記事以降、九六一年シェツヴァル月に至るまで、他の人物がイェニチエリ・アースイに存在したとの記載は、管見の及ぶところ見られず、逆に、少なくとも回曆九五四年頃にはペルテウが、史料にイェニチエリ・アースイとして現われるから、かなり長期にわたりペルテウがこの地位にあったのは確かである。回曆九六一年にルメリ・ベイレルベイスイに転じたペルテウ・パシヤは、翌九六二年ジルヒツジエ月一九日には、第四宰相に転じた。その後、第三宰相を経て、九七二年には第二宰相となり、スレイマン大帝の没したときには、この地位にとどまっていた。しかし、のちにレパント沖海戦の指揮官の一人として敗戦の責を問われ、回曆九七九年ジエマージー・ウル・アフル月に宰相の職を免ぜられた。スレヤーは、その後九八二年に没したと記し、トゥランも典拠は挙げずにこれに従っている。しかし、エルドールアンは、現存の廟の墓誌に回曆九八〇年ジエマージー・ウル・アフル月一日に没したと述べているので、ここでは、これに従うこととしたい。

⑦ フェルハト・パシヤ

フェルハト・パシヤは、メフメット・フェルハト・パシヤ Mehmed Ferhad Pasa と呼ばれ、メフメットが本来の名前でフェルハトは、ラカーブ Lakab (仇名) だとも言われる。フェルハト・パシヤは、ペチエヴィーの宰相列伝にも入っているが、政治家としてのみならず書家(ハッタート Hattat)としても名高く、一八世紀のムスタキム・ザーデ・スレイマン Mustakimzade Süleyman の『トゥッフフェット・ウル・ハッターティン Tuhtet ul-Hattat』を始めとする書家の列伝のなかにもその伝を見出すことができる。

原初のフェルハト・パシヤの経歴についてはペチエヴィーらは何も語らず、ただスレヤーのみが内廷出身であったとするとどまる。一八世紀のさきのムスタキム・ザーデの『トゥッフフェット・ウル・ハッターティン』やアイヴァ

ンサライーの『ヴェエフアーヤートウ・セラータイン・ヴェ・メシャーヒリ・リジャール』では、その経歴について、イエニチエリ軍団に属するコルジュ・バシユ Korucu bası からイエニチエリ・アースイとなったとしているが、⁽³⁴⁾ジエラール・ザーデの回曆九六一年シエツヴァアル月末の条に、第二カプジュ・バシユ İkinci Kapuchası のフェルハト・アーがイエニチエリ・アースイとなったとしているから、⁽³⁵⁾外廷の要職カプジュ・バシユの地位にあったと見るべきである。カプジュ・バシユには、この頃は内廷出身者が任命されるのが殆ど例となっていたから、スレヤーに従つて、フェルハトも当初は内廷にあったものと推定してよいのではないかと思われる。

フェルハトが、外廷を出てイエニチエリ・アースイに転じた日附については、ジエラール・ザーデによる限り九六一年シエツヴァアル月二三日より後、翌ジルカッデ月一日より前としか特定できないが、『年号日附記録集』にはシエツヴァアル月二五日に、セル・ベツヴァービン（すなわちカプジュ・バシユ）のフェルハト・アーがイエニチエリ・アースイとなったとある。⁽³⁶⁾このとき、フェルハトは、前項で採り上げたベルテウ・パシヤがルメリ・ベイレルベイスイに転出したあとに後任となつたのであつた。

その後、九六五年レビー・エル・エツヴェル月二〇日になつて、フェルハト・アーは、イエニチエリ・アースイから、カスタモヌのサンジャク・ベイに転じたものと思われ⁽³⁷⁾る。前にも言及したように、カスタモヌ・サンジャウのサンジャク・ベイ職は、イエニチエリ・アースイ職と関係が深かつた。ただ、ウズンチャルシュルは、イエニチエリ・アースイで寵を失つた者が多くこの職に任ぜられたとしているのは、⁽³⁸⁾少なくともこの時代については全面的にあてはまらないであろう。とりわけ、フェルハトの場合には、おそらくカスタモヌのサンジャク・ベイに転じて間もなくスレイマン大帝の王子メフメットの娘が降嫁せしめられ、フェルハトは同年中に宰相、おそらく第五宰相に任ぜられた。

宰相就任後、フェルハトは、順次昇格し、スレイマン大帝の没したときには第三宰相に達していた。のち、セリム二世時代に宰相の職を解かれ、免官中の回曆九八二年シエツヴァル月二四日に没した。⁽³⁴⁵⁾

⑧ クズル・アフメットル・ムスタファ・パシャ

ムスタファ・パシャは、一五世紀までアナトリア西北部のカスタモヌを中心に勢力をはったジャンダル君侯国(ジャンダル・ベイリイ Candar Beyliği)の君侯(ベイ Bey)であったイスフェンディヤール・ベイ İsfendiyar Beyの流れをくみ、オスマン朝に仕えたクズル・アフメット Kızıl Ahmed の孫にあたるどころから、クズル・アフメットル Kızıl Ahmedü の仇名によって呼ばれる。⁽³⁴⁶⁾ムスタファ・パシャの兄弟には、詩人としてシエムシー Semsî の雅号によって名高いアフメット・パシャ Ahmed Paşa がある。⁽³⁴⁷⁾

ムスタファ・パシャは、ムスリム・トルコ系の旧君侯の血統の出身であったが内廷に入り、ペチエヴィーによれば、外廷に出たのちにカプジュ・バシユとなり、⁽³⁴⁸⁾のち、外廷の最も重要な職といえる第一ミリー・アフルとなった。⁽³⁴⁹⁾そして、回曆九六二年ジルヒツジェ月一九日に、宰相に転じたペルテウ・パシャの跡を承けて、第一ミリー・アフルから、直接にルメリ・ベイレルベイスに転じた。⁽³⁵⁰⁾

その後、回曆九六九年ムハツレム月二四日に、ルメリ・ベイレルベイスから第五宰相に進んだ。⁽³⁵¹⁾ルメリ・ベイレルベイスの後任には、次項で採り上げるセミズ・アフメット・パシャが、イエニチエリ・アースイより就任した。宰相に就任したムスタファ・パシャは、前節でみたように、一旦第四宰相にまで進みながら、マルタ遠征失敗の責を問われて一時職を免ぜられ、まもなく、おそらくは第五宰相に復帰し、スレイマン大帝の没したときには、この職にあった。しかし、セリム二世の治世に入ってまもなく、回曆九七四年中に引退し、⁽³⁵²⁾メッカ巡礼に赴いた。セラニキー

によれば、巡礼から帰ったのちに没したという。没年はセラニキーには明記されていない⁽³⁹⁴⁾。

⑨ セミズ・アフメット・パシヤ

スレイマン大帝の任命した最後の宰相は、セミズ・アフメット・パシヤであった。アフメットは、ペチエヴィーによればアルバニア系であったという⁽³⁹⁵⁾。アフメットは、ペルテウ・パシヤの項でもふれたように、元來はスレイマン大帝の大宰相イブラヒム・パシヤと対立して処刑された強力なバシユ・デフテルダル、イスケンデル・チエレビイの個人の家政に属する奴隸の一人であった。イスケンデル・チエレビイが没落したとき、その多数の奴隸は、没収されたが、アフメットもそのなかの一人で、没収後、内廷に編入された⁽³⁹⁶⁾。ペチエヴィーによれば、内廷から、カプジュ・バシユとなつて外廷に出たという⁽³⁹⁷⁾。そして、その後、カプジュ・バシユから転じて、イエニチェリ・アースイとなつた。転出は、『年号日附記録集』によれば、回曆九六五年レビー・エル・エツヴェル月二〇日のことで、前々項で扱つたフェルハト・パシヤの後任として任命されたという⁽³⁹⁸⁾。

その後、回曆九六九年ムハッレム月二四日に、今度は前項で採り上げたムスタファ・パシヤの後任として、イエニチェリ・アースイからルメリ・ベイレルベイスイに進んだ⁽³⁹⁹⁾。ついで、ルメリ・ベイレルベイスイから宰相となつた。年代記等には、任命の時期についての記述を欠くが、『年号日附記録集』によれば、回曆九七〇年ジルカッデ月一三日のことであつたという。宰相就任期には、第六宰相であつたがのち次第に昇格し、スレイマン大帝の没した時には、第四宰相の地位にあつたと見られる。

セミズ・アフメット・パシヤは、スレイマン大帝没後も、ひきつづきセリム二世に宰相として仕え、その末年には第二宰相に昇り⁽⁴⁰⁰⁾、ついでその子のムラト三世の治世の入り、スレイマン大帝の晩年以來、大宰相の地位を保つてきた

ソコルル・メフメット・パシヤが暗殺された回曆九八七年シャーバン月にいたり、ついに大宰相となつた。^(註)しかし、いくばくもなく、翌九八八年レビー・エル・エツヴェル月に、大宰相在任のまま没した。^(註)

(5) おわりに

本節においては、可能な限り史料の典拠を示しつつ、スレイマン大帝時代の宰相・宰相の経歴をたどり、オスマン朝の支配組織内におけるキャリアを中心とした小伝を検討の材料として提供することに努力してきた。前節及び本節の結果をふまえて、次節においては、スレイマン大帝時代に在任したすべての大宰相・宰相を対象に、その経歴を体系的に分析し、そこに見られるキャリア・パターンの特色を明かすこととしよう。

1 『ジャカイク・ウツ・ニユマニエ』に於れば、元来は、ピール・メフメットであつたものが、セリム一世の即位後に、ラカーブとてピリーの名を賜つたと云ふ。(Tasköprüzâde, Es-Sağâ'iq en-No'mânijje, tr. by Osman Rescher, Konstantinopel-Galata, 1927, 204, 以下 Tasköprüzâde (Rescher) と略す。)

しかし、後述するように、ピール・メフメットが未だ宰相となつていなかったバヤズィット二世時代の回曆九〇九年附の文書に、既に「ピリー・メフメット」として現われているところから見ると、この記事は疑わしい。

2 この人物については Tasköprüzâde (Rescher), 8—9.

3 Asik Çelebi, 239—a, Peçevi, I, 20.

4 Mehmed Zeki (Pakalın), "Piri Mehmed Paşa", Türk Tarih Encümeni Mecmuası, No. 19, 325, Şerafeddin Turan, "Piri Mehmed Paşa", İA, IX, 559.

5 Turan, İA, IX, 559.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

ただ、イブラヒム・ハック・コンヤルは、アマスィヤ出生説を、いくつかの根拠を挙げて強く主張している。Ibrahim Hakrı Konyalı, *Âbideleri ve Kitabeleri ile Niğde Akarary Tarihi*, II, 2589—2590.

9 Turan, *IA*, IX, 559.

7 メンメット・ゼキ・(ハカルン)によれば、ヒュセイン・フサーメットヤン Hüseyn Husameddin が回曆九〇〇年頃のハイヌィア・イヌラム法廷文書に「ウル・メンメットの職名がある」と述べている。Mehmed Zeki (Pakalın), "Piri Mehmed Paşa", 326.

8 Taşköprüzâde (Rescher), 204.

9 Taşköprüzâde (Rescher), 204, *Sehi*, 120., *Aşık Çelebi*, 239—a.

10 ウレマーのキャリアから、財政及び文書行政を扱う実務官僚としてのキャリアタイプ *Kاتب* (書記) のキャリアへの転身が、当時広く見られた。より詳しくはとりあえず次の拙稿を参照されたい。「官僚の世界」、『講座イスラム』3、筑摩書房、一九八六年、八八—九二頁)。

11 Ömer Lütfü Barkan, ed., "İstanbul Saraylarına ait Muhasebe Defterleri", *Belgeler*, IX, 13., 348. (以下 "Muhasebe Defterleri" と略し頁数のみを記入する。)

12 "Muhasebe Defterleri", 363.

その後九一七年レシエフ月四日に至るまで、ルメリ・デフテルダル、カスムないしくヴァーメットヤン(両者が同一人である点については次項で論ずる。)と対をなして「ウリー・メンメットの名が中央に記しは現われぬ。」(Gökbilgin, *Paşa Livası*, 92, 93., 103., 107.)

13 Rüstem, 33., *Tac üf-Tevarih*, II, 205.

14 Feridun, I, 406., 名刺「フホリヤットの『シモンシャート』に含まれるハイダル・チェレビイの日録では、シャールバン月

二冊目と云ふべし。 (Feridun, I, 464.)

- 15 Feridun, I, 476.
- 16 Feridun, I, 477.
- 17 Feridun, I, 493.
- 18 Feridun, I, 456.
- 19 Feridun, I, 583.
- 20 Pecevt, I, 28.
- 21 九二六年附の一文書に「ムスタファ・ビン・アブドゥルハイ・ウル・ヴェジリー・サーニー Mustafa bin Abdullhay ib-Vezir-i Sanl」云々の語句から、父親が非ムスリムであり、テウシルメにより自らはムスリムとなった可能性が高い。(Kon-yali, Aksaray Tarihi, II, 2625—2626.)
- 22 Turan, IA, IX, 560.
- 23 SO, IV, 372.
- 24 Feridun, I, 451.
- 25 Feridun, I, 403. 回書中のハイタル・チヘレビイの記録は「レシヘン月二日となつて」。 (Feridun, I, 462.)
- 26 Feridun, I, 453.
- 27 SO, IV, 15.
- 28 Pecevt, I, 28.
- 29 Konyal, Aksaray Tarihi, II, 2626.
- 30 Feridun, I, 463.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

- 13 Feridun, I, 453., 486.
- 32 Tac üt-Tevarih, II, 384.
- 33 Celâlzade, 22—b.
- 34 Pecevi, I, 28.
- 35 SO, IV, 47.
- 36 Gökbiçgin, Paşa Lîvası, 433.
- 37 Hedda Reindl, Männer um Bayezid, Berlin, 1983, 234—235.
- 38 Cengiz Orhonlu, "Kasım Paşa, Djazari", EI², IV, 722., Mehmet Zeki Pakalın, Maliye Teşkilâtı Tarihi, Vol. I, n.p., 1977., 77—78.
- 39 Ramazanazade, 240., Pecevi, I, 28., Atâ'i, I, 104.
- 40 Ramazanazade, 182—183.
- 41 Friedrich Giese, ed., Die alt-osmanische Chronik des 'Aşîkpaşazâde. Ist. ed., 1929, Rep. ed., Osnabrück, 1972, 199. Franz Taeschner, ed., Ğihânnümâ, I, Leipzig, 1951., 231.
- 42 Brigitte Moser, ed. and tr., Die Chronik des Ahmed Sinân Çelebi genannt Bihîştî, München, 1980, Faksimile, 14—r.
- 43 Sehî, 118.
- 44 Latîfî, 219.
- 45 Âşık Çelebi, 214—a., Kınalzade, I, 546—548.
- 46 Tac üt-Tevarih, II, 216.
- 47 Hüseyin, Beda'i ul-Vekat'i, ed. by Tiveritsova, Moskow, 1961, II, 414—a.

- 49 Belîğ İsmail, *Güldeste-i Riyaz-i İrfan*, Bursa, 1287 H, 65—66.
- 50 Hüseyin Ayyansarâyî, *Vefeyât-ı Selâtin ve Meşâhîr-i Ricâl*, ed. by Fahri Ç. Derin, İstanbul, 1978, 79. (馮レ Ayyansarâyî, *Vefeyât 馮レ 皇朝 十 九 〇*)
- 51 Hüseyin Ayyansarâyî, *Hadikat ül-Cevamî*, I, İstanbul, 1281 H, 79.
- 52 "Muhasebe Defterleri", 340.
- 53 "Muhasebe Defterleri", 363.
- 54 İ. Aydın Yüksel, *Osmanlı Mimârîsinde II. Bâyezid Yavuz Selim Devri*, V, İstanbul, 1983, 6.
- 55 Gökblgin, Paşa Lîvası, 92., 93., 103., 107., Yüksel, II. Bâyezid Yavuz Selim, V, 149.
- 56 Çağatay Uluçay, "Yavuz Sultan Selim nasıl Padişah oldu?—2", İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi, Vol. VII, No. 10, 117—118.
- 57 Uluçay, "Yavuz Sultan Selim", VII, 10., 122.
- 58 Çağatay Uluçay, "Kanunî Sultan Süleyman ve Ailesi ile İlgili Bazı Notlar ve Vesikalar", in *Kanunî Armağanı*, Ankara, 1970., 244.
- 59 Uluçay, "Vesikalar", 247.
- 60 Feridun, I, 466.
- 61 Feridun, I, 467.
- 62 Feridun, I, 468.
- 63 Peçevî, I, 28.
- 64 Peçevî, I, 28.

- 64 SO, I, 196.
- 65 Clement Huart, "Ahmed Paşa", IA, I, 192—193.
- 66 Halil İnalçık, "Ahmad Paşa Khāḥn", EI², I, 293.
- 67 Hoca Sadeddin, "Selimname", in Tac üt-Tevarih, II, 616.
- 68 Franz Babinger, Geschichtsschreiber der Osmanen und Ihre Werke, Leipzig, 1927, 125.
- 69 Feridun, I, 404.
- 70 Feridun, I, 406.
- 71 Feridun, I, 464.
- 72 Feridun, I, 497.
- 73 OT, II, 547.
- 74 在任の証拠のいふほどをたゞのそとにた列記するに、回曆九二二年 (Gökbilgin, Paşa Livası, 81.)、回曆九二二年シル
 カツ月六日 (Müneccimbâş-B, II, 486.)、同年シルヒムシ月末以降 (Tac üt-Tevarih, II, 358.)、九二三年トハム
 月初 (Rüstem 53.) となる。
- 75 Tac üt-Tevarih, II, 384.
- 76 Rüstem, 58.
- 77 Celâlzade, 23-b.
- 78 彼の丑面を以て置たる體裁にして、維つて Tayyib Gökbilgin, "İbrâhim Paşa", IA, V-2., 908.
- 79 Pecevi, I, 20.
- 80 Gökbilgin, IA, V-2., 908.

- 18 Ata, II, 25.
- 83 Gökbiğün, İA, V-2., 908.
- 83 Celalzade, 111-a.
- 84 Celalzade, 111-a, Lütfi, 314., Peçevi, I, 79.
- 85 Ravzat, 419., Solakzade, 443.
- 86 Gökbiğün, İA, V-2., 909., OT, II, 545.
- 87 İsmail Hakkı Uzunçarşılı, Osmanlı Devletinin Saray Teşkilâtı, Ankara, 1945., 323.
- 88 Tayyib Gökbiğün, "Kanunî Sultan Süleyman Devri Başlarında Rumeli Eyaleti, Livaları, Şehir ve Kasabaları", Bel-
leten, Vol. XX, No. 78., 248. (シレ' Gökbiğün, "Rumeli Eyaleti" 全註トナセ° (GOR, III, 795.)
- 89 大ムルビシ' クンヌメナセ' ヒシハトシ線圖の一覽表のなること' ヲトトコトイ' シンキヤカドカトシラセ° (GOR, III, 795.)
- 90 Celalzade, 287-b.
- 91 Cavid Baysun, "Ayras Paşa", İA, I, 43—44.
- 92 İsmail Hakkı (Uzunçarşılı), Kitabeleri, II, 89.
- 93 İsmail Hakkı Uzunçarşılı, "Tuğra ve Pençeler ile Ferman ve Buyruklulara dair", Belleten, Vol. V, No. 17-18., 137.
- 94 Baysun, İA, I, 44.
- 95 Peçevi, I, 20.
- 96 アルラン・ズチエヒニトシ' 各種の軍団と最前線の城壁攻撃など危険の多い任務を受けしむる決死隊として言はるべきものを總
括トナセ° (Mehmed Zeki Pakalın, Osmanlı Tarih Deyimleri ve Terimleri Sözlüğü, 2nd. ed., İstanbul, 1971., III, 181-182.
シレ' Terimleri Sözlüğü 全註トナセ°) 将軍のヘトキヤク・シンキヤカドカトシラセ°の軍団隊のよほど長はつたのであろう。

- 66 Ata, II, 18, «*Ученъ на ханъта и ханъта и ханъта*» (Baysun, IA, I, 44.)
- 66 OT, II, 547.
- 66 GOR, II, 497.
- 100 Baysun, IA, I, 44., V.J. Parry, "Ayās Pasha", EI², I, 779.
- 101 Tac üf-Tevarih, II, 384., Müneccimbaşı-B, II, 498.
- 102 Mehmed Said, Gülşen-i Maarif, I, İstanbul, 1222 H, 548.
- 103 SO, I, 446.
- 104 Müneccimbaşı-A, III, 41.
- 105 OT, II, 547.
- 106 İsmail Hakki Uzuncarsılı, Osmanlı Devleti Teşkilâtından Kapukulu Ocakları, I, Ankara, 1943, 182-183.
- 107 Celalzade, 40-b.
- 108 Henri Laoust, Les gouverneurs de Damas sous les Mamlouks et les premières Ottomans, Traduction des annales d'Ibn Tūlūn et d'Ibn Ğūn'a, Damas, 1952., 159. (シムル・ラウスト, 文藝春秋社)
- 109 Laoust, 161.
- 110 少くとも、九二八年レジエブ月二〇日には、ルメリ・セイレル・メイヌイとして史料に現われている。(Müneccimbaşı-B, II, 517.)
- 111 Feridun, I, 533.
- 121 Ömer Lütfi Barkan and Ekrem Hakki Ayverdi, eds., İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri 953 (1546) Tarihli, İstanbul, 1970., 431.

- 113 Tac üf-Tevarih, II, 340.
- 114 Pecevi, I, 28.
- 115 Faruk Sümer, "Kasım Paşa, Güzele", IA, VI, 386.
- 116 SO, IV, 47.
- 117 Sümer, IA, VI, 386.
- 118 Tac üf-Tevarih, II, 340., Mineccinbaşı-B, II, 481.
- 119 この文書は、D 九七二の御製書であることが明かされた (Metin Kunt, Sancaktan Eyalete, İstanbul, 1978, 32.)。ケルカンと
 して呼ばれていた。 (Ömer Lütfi Barkan, "H. 933-934 (M. 1527-1528) Mali Yılına ait bir Bütçe Örneği", İhve II,
 İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası, Vol. XV, No. 1-4, 303-307. 以下 Barkan, İFM, XV, 4 参照)。
 文書自体については D 九七二の御製書として言及する。ケルカンは、この文書が成立したのをスレイマン大帝の初年、回曆九
 二七年シエツヴァル月一三日から九二八年レシエツェ月の間であると推定している (Barkan, İFM, XV, 303.)。クントによ
 るそのおおよそは、(Kunt, Sancaktan Eyalete, 32.)。しかし、イスマメット・シルオウルによれば (İsmet Miroğlu, XVI,
 Yızyılda Bayburt Sancığı, İstanbul, 1975, 24.)。ケルカンは、この文書の成立を回曆一五一七年 (回曆九
 二二一九三三年) としている。 (Dündar Aydın, Erzurum Beylerbeyliği ve Teşkilâtı, Kuruluş ve Gelişme Devri
 (1535-1566), Erzurum, 1972 (Doktora Tezi) の「土耳其文書自体は未見」)。
- この文書は、まさに独自の考証を加える。『フェリマン・ベノの『ゲレンジャー』』に含まれる「ケルカ・チエレゴ」の
 日録のなかの回曆九二三年ラマゼン月二六日の条 (Feridun, I, 493.) にみえる官職の叙任の結果の一部が、反映され、ある
 一部分は反映されていないことが判明した。このことから、筆者はこの文書を、回曆九二三年ラマゼン月二六日頃のサンジャ
 ク・ベイの配置の一覧と考える。詳しい考証は何らかの形で公表したいと考えている。

- 120 Barkan, İFM, XV, 306.
- 121 Tac üti-Tevarih, II, 383.
- 122 Hüseyin G. Yurdaydın, ed., Naşuh üs-Silahı (Matrakçı), Beyan-ı Menazil-i Seler-i İrakeyn-i Sultan Süleyman Han, Ankara, 1976, 282. (ՃԼԷ՛ Beyan-ı Menazil-i Seler-i Sultan Süleyman Han)
- 123 Lâtfî, 294, Celâlzade, 34-a.
- 124 Celâlzade, 64-b.
- 125 Lâtfî, 284.
- 126 Feridun, I, 523.
- 127 Celâlzade, 109-a., GOR, III, 794.
- 128 Celâlzade, 121-a., Lâtfî, 315.
- 129 GOR, III, 795.
- 130 Sümer, İA, VI, 387.
- 131 Sümer, İA, VI, 387.
- 132 Gökbiğlin, "Rumeli Eyaleti", Belleken, Vol. XX, No. 78, 251—252.
- 133 Kunt, Sancaktan Eyaleti, 125.
- 134 Peçevi, I, 28.
- 135 Lâtfî, 389.
- 136 Sümer, İA, VI, 387.
- 137 Barkan and Ayverdi, İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri, 431.

- 138 İsmail Hamî Danişmend, *İzâh Osmanlı Tarihi Kronolojisi*, V, 179. (イシハ・クロノロジイ 巻五 179頁)
- 139 Peçevî, I, 30.
- 140 SO, IV, 372.
- 141 Nelo Drizari, *Albanian-English and English-Albanian Dictionary*, New York, 1979., 89.
- 142 Peçevî, I, 30., SO, IV, 372.
- 143 Peçevî, I, 30., SO, IV, 372.
- 144 SO, IV, 372.
- 145 Feridun, I, 400.
- 146 Celâlzade, 71-a.
- 147 Celâlzade, 28-a.
- 148 Mehmed İzzet, *Harita-i Kapudan-ı Deryâ*, İstanbul, 1285 H, 27.
- 149 SO, IV, 372., *Kronoloji*, V, 179.
- 150 Mehmed İzzet, *Harita*, 27.
- 151 Feridun, I, 537.
- 152 Kâtib Çelebi, *Tuhfet ül-Kibar*, İstanbul, 1329 (Maliye), 139.
- 153 Bostan, 163.
- 154 Bostan, 163.
- 155 Kunt, *Sancaktan Eyalete*, 125.
- 156 Bostan, 163.

- 157 Laoust, 165., 181.
- 158 Laoust, 165.
- 159 Laoust, 181.
- 160 Boston, 163.
- 161 Laoust, 165.
- 162 Laoust, 182.
- 163 Boston, 163.
- 164 SO, IV, 372.
- 165 Tayyib Gökbiğgin, "Lutfi Paşa", IA, VII, 96.
- 166 Osmanzade, 27.
- 167 Ata, II, 19.
- 168 Das Asafname des Lutfi Pascha, ed. and tr. by Rudolf Tschudi, Berlin, 1910., Text, 2. (Asafname
 ʿAsafname)
- 169 Asafname, 2.
- 170 Gökbiğgin, IA, VII, 96—97.
- 171 Asafname, 2.
- 172 Asafname, 2.
- 173 シーリ・アーレムの職については、回曆九二〇年レジエフ月一〇日にそれまで在職していたフェルハント・アー Ferhad Ağa
 が転出して別のフェルハント・アーが後任となり (Feridun, I, 404., 463.) 九二三年ムハッレム月一日にこのフェルハント・

ラー (Gök's 宰相フヘルンナ・ペンヤ) がアナル・ニレルベイスイに提出するとフラム・ブー Behram Ağa が後任となる (Feridun, I, 453., 486.)。このフラム・ブーが九二四年レビー・エル・エッセル月一日まで在任した (Feridun, I, 497.)。

- 174 Asafname, 2—3.
- 175 Pecevi, I, 21.
- 176 Gökbiğir, IA, VIII, 97.
- 177 Kunt, Sancaktan Eyalete, 127.
- 178 Gökbiğir, "Rumeli Eyaleti", Belleten, Vol. XX, No. 78., 261.
- 179 Kunt, Sancaktan Eyalete, 126.
- 180 Feridun, I, 503.
- 181 Bostan, 198.
- 182 Lâtfi, 380.
- 183 SO, IV, 91.
- 184 Tschudi, Das Asafname, Einleitung, IX.
- 185 Köprülüzade Mehmed Fuad (Köprülü), "Lâtfi Paşa", Türkiyat Mecmuesi, Vol. I, 121.
- 186 Gökbiğir, IA, VII, 96.
- 187 OT, II, 548.
- 188 SO, IV, 91.
- 189 Gökbiğir, IA, VII, 98.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

- 190 Lâti Paşa, Asafname, ed. by Ali Emiri, Istanbul, 1326, 6.
- 191 Asafname, 3.
- 192 GOR, III, 199.
- 193 GOR, III, 678.
- 194 Beyan-ı Menazil, 281—282.
- 195 Lâti, 358.
- 196 Beyan-ı Menazil, 250.
- 197 キョプリユリユは、ルトフィー・パシャ自身が何も言及しておらずハンメル引くフェルデー（実はボスタン）以外の史料も見あたらないところから、ルトフィー・パシャのルメリ・ベイレルベイスィ就任を疑っている。(Köprülü, "Lâti Paşa", 121.) しかし、逆にハンメルのところどころを否定する決定的根拠もみあたらないので、ここでは、キョクブルギンらとむむにハンメルに従っておく。
- 198 『年月日附記録集』には、回曆九七一年ラマザン月一三日に没したとあり、("Tarih Kayıtları", 88.)、あるいはこの方が正しいかとも思われるが、ここでは同時代人アリの、未刊のゆえに今回は検索の範囲外とした『キェンフ・ウル・アフバール Kınıh ül-Ahbar』に拠って九七〇年没とするキョプリユリユ、キョクブルギンに従っておく。(Köprülü, "Lâti Paşa", 131., Gökbiçgin, IA, VII, 100.)
- 199 Pecevi, I, 29.
- 200 SO, IV, 113.
- 201 SO, IV, 113.
- 202 Celalzade, 297-b.

- 203 Ekren Hakkı Ayverdi, *Avrupa'da Osmanlı Mimarı Eserleri*, Vol. II, Book III, *Yugoslavya, İstanbul*, 1981., 308.
 ヲノ地ニシテ H. Šabanović, *Bosnaski Pašaluk, Sarajevo*, 1959. ニ「ハルビエ」を著述を記述するところの「殿」なる未
 見である。
- 204 Peçevi, I, 29.
- 205 Takâz, *Macaristan Türk Âleminde Çizgiler*, tr. by Sadreddin Karatay, Ankara, 1948., 331.
- 206 Peçevi, I, 29.
- 207 Peçevi, I, 21.
- 208 Tac üt-Tevarih, II, 395.
- 209 同時代史料としてのこととして明言した箇所を見出しえないが、後代のオスマン・サーネは「宰相位をもちつて(大臣
 から)外に出づ(ムンーンズ・シャム Muhafz-i Sam (シリアの守護)とやら」(Osmanzade, 28.) 及び「タタ (Ata, II, 20.)
 を」スルヤー (SO, III, 78.) を用いて従ふ。これにウズンチャルシヘルも同様とみえる (OT, II, 549)。「宰相位をもちつて」
 という点には疑問が残るが、内廷から直接 シャム・ハイレルニイスイに転出したという点は採用しておく。
- 210 Laoust, 163.
- 211 Faruk Simer, "Süleyman Paşa, Hâdim", *IA, XI*, 194.
- 212 Celalzade, 123-b.
- 213 Celalzade, 129-a.
 なお、この際「シホラル・サーネはわちわち「ベイレベリ тарикі іле」を引く(ついでに
 このから)ムスル (ヒジブト)の支配体制が当時まだ完全には確立していなかったことが知れる。
- 214 Simer, *IA, XI*, 194.

- 215 GOR, III, 678.
- 216 Bostan, 163.
- 217 Sümer, IA, XI, 194.
- 218 OT, II, 549.
- 219 Fevzi Kurtoglu, "Hadım Süleyman Paşa'nın Mektupları ve Belgradın Muhasara Planı", Belleten, Vol. IV, No. 13, 59.
- 220 Lütfi, 358.
- 221 Celalzade, 333-b.
- 222 Sümer, IA, XI, 195.
- 223 Celalzade, 333-b.
- 224 Rüstern, 151.
- 225 SO, II, 327.
- 226 Pecevi, I, 21., Ata, II, 21., Osmanzade, 28.
- 227 Şinasi Altundağ=Şerafeddin Turan, "Rüstern Paşa", IA, IX, 800.
- 228 OT, II, 549.
- 229 Ata, II, 29.
- 230 Altundağ=Turan, IA, IX, 800.
- 231 ㄨㄒㄢ・ㄨㄒㄢㄘ ㄨㄒㄢㄘ ㄨㄒㄢㄘ Pecevi, I, 39.
- 232 Altundağ=Turan, IA, IX, 800.
- Osmanzade, 29., Ata, II, 21.

- 233 SO, II, 327.
- 234 OT, II, 549, Altındağ=Turán, IA, IX, 800.
- 235 Feridun, I, 566.
- 236 Beyan-ı Menazil, 238.
- 237 Celâlzade, 298-a.
- 238 Peçevî, I, 29, 442.
- 239 Peçevî, I, 29.
- 240 J.L. Bacqué-Grammont, "Khosrev Paşa", EI², V, 35, Idem, "Notes et documents sur Dîvâne Husrev Paşa",
Rocznik Orientalistyczny, Vol. 41., No. 1., pp. 21—55. (シル・バクケ・グラモント, "Notes" と註記の風俗の考(ホトキ)
- 241 SO, II, 272.
- 242 Bacqué-Grammont, "Notes", 23.
- 243 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 23.
- 244 SO, II, 272.
- 245 Feridun, I, 404., 462.
- 246 セリム一世の最晩年にあたる九二六年にも、ヒュスレウ・パシヤはカラマン・ベイレルベイスイとして、『ルトフィー・パシヤ史』に現われている。(Lâtih, 284.)
- 247 Beyan-ı Menazil, 238.
- 248 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 28—30.
- 249 Feridun, I, 498.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(二)

- 250 Bacqué-Grammont, EI², V, 35.
- 251 Feridun, I, 543—544, GOR, III, 66—67.
 邦文 'アノカノ高麗古本書體の五十四大字文書は、
 Bey の全が同文である。(Kunt, Sancaktan Eyaleti, 130.)
 キーヤルニクニル・シイルニイヌイトロフ、ゴリスラハ・シハ
 Hüsrev
- 252 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 38.
- 253 Bacqué-Grammont, "Notes", 38.
- 254 Celâlzade, 200-a.
- 255 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 39.
- 256 Laoust, 167, Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 40.
 GOR, III, 145—146.
- 257 GOR, III, 145—146.
- 258 Laoust, 167.
- 259 Laoust, 183.
- 260 Lâtîf, 351.
- 261 Lâtîf, 358.
- 262 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 42—47.
- 263 Bacqué-Grammont, EI², V, 35, Idem, "Notes", 44.
- 264 Celâlzade, 297-b, Bacqué-Grammont, "Notes", 51.
- 265 GOR, III, 226—227.
- 266 Lâtîf, 434, Bacqué-Grammont, "Notes", 55.

- 267 Pecevi, I, 24.
 268 SO, I, 198.
 269 Pecevi, I, 24.
 270 Pecevi, I, 24.
 271 Ata, II, 24.
 272 SO, I, 198.
 273 Cavid Baysun, "Ahmed Paşa, Kara", IA, I, 193.
 274 Feridun, I, 511.
 275 Beyan-ı Menazil, 238.
 276 Beyan-ı Menazil, 238.
 277 GOR, III, 227.
 278 Lütfi, 351.
 279 Beyan-ı Menazil, 238., Rüstem, 107.
 280 GOR, III, 227.
 281 Gökbiğün, Paşa Lıvası, 505.
 282 Pecevi, I, 30.
 283 SO, I, 94.
 284 Pecevi, I, 179.
 285 Celalzade, 366-a.

- 286 Lütfi, 388.
 287 Lütfi, 388—389.
 288 “Tarih Kayıtları”, 85.
 289 Peçevi, I, 30.
 290 Peçevi, I, 30.
 291 SO, II, 260.
 292 Popovič, “Spisak Hercegovackih Namesnika u XVI Veku”, 97.
 293 SO, II, 260.
 294 “Tarih Kayıtları”, 88.
 295 Peçevi, I, 24.
 296 Peçevi, I, 24.
 297 SO, III, 499.
 298 Tayyib Gökbilgin, “Ah Paşa, Semiz”, İA, I, 341.
 299 OT, II, 551.
 300 Osmanzade, 31., Ata, II, 25.
 301 Peçevi, I, 24.
 302 Ömer Lütfi Barkan, “954—955(1547—1548) Mali Yılına ait Osmanlı Bütçesi”, İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası, Vol. XIX, No. 1-4., 262. (231- Barkan, “H. 954-955 Bütçe” 231-236°)
 303 Rüstem, 152.

- 304 Süheylî, *Tarih-i Mısır-î Cedid*, İstanbul, 1142 H, 55.
- 305 Ravzat, 431.
- 306 Celalzade, 446-b.
- 307 Tayyib Gökbiğîn, "Mehmed Paşa, Sokollu", *IA*, VII, 595.
- 308 Abdürrahman Şeref, "Sokollu Mehmed Paşa'nın Evralı Ahvalı ve Ailesi hakkında Ba'az Malumat-Cevahir-ül-Menakıb", *Tarih-i Osmanî Encümeni Mecmuası*, Vol. V, No. 29, 257—265. (以下 Abdürrahman Şeref, "Sokollu" 以下略す)
- 309 Abdürrahman Şeref, "Sokollu", 261.
- 310 GOR, III, 269. ソンメルスの日附はオホネシイノ側の時イスタンブル公館からの報告に基づく。『年月日附記録集』のキヤートマン・チホロクヤなリドナレキ一日チレツト五三半シホージー・ウル・ホツサホル月六日のコソコナリツス。
- (“Tarih Kayıtları”, 76., Kâtip Çelebi, *Tuhtet ül-Kibar*, 2nd ed., n.p., 1329 (Malıye), 59.)
- 311 Abdürrahman Şeref, "Sokollu", 261.
- 312 Rüstem, 145.
- 313 Celalzade, 411-a., 411-b.

なお、『タムカート』の校訂者が、版本の索引で、この項をソフ・メフメット・パンシャに關するものとして分類しているのは、先に示したソフ・メフメット・パンシャの経歴に於いて、明かに誤りである。同書の索引のなかのソコルル・メフメット・パンシャとソフ・メフメット・パンシャの項には、相互の混同による誤りがあつた。 (Petra Kappert, "Einführung" Celalzade, 143.)

314 Nühbet, III, 80.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

- 315 Müneccimbaşı-B, II, 561—562.
- 316 Gökbiçgin, IA, VII, 596.
- 317 Selaniki, 155.
- 318 SO, II, 37—38.
- 319 Abdülkadir Erdoğan, "Kannunî Süleyman Devri Vezirlerinden Pertev Paşa'nın Hayatı ve Eserleri", Vakıflar Dergisi, No. II, 233—240. (以下 Erdoğan, "Pertev Paşa", 以下略して頁数を示す)
- 320 Şerafeddin Turan, "Pertev Paşa, Mehmed", IA, IX, 552—554.
- 321 Erdoğan, "Pertev Paşa", 233.
- 322 Turan, IA, IX, 552.
- 323 Erdoğan, "Pertev Paşa", 233.
- 324 ペチエウイーは、のさば本籍でもとり上げる。イスケンデル・チェレビイのもと奴隷で、セリム二世の時代に大宰相となつたヤミズ・アメンツァ・ン・シヤが、あるときタイーヴァン(廟堂)で、旧主イスケンデル・チェレビイのありし日の威勢を回顧して、いまここに我々七名の宰相がいるが、イスケンデル・チェレビイの威勢はこの七人の宰相の威勢のすべてをおわたすものよりおわたす大きかつたと云ふたと云えてゐるにすぎない。(Pegevi, I, 41.) エルトーマンは、この逸話を誤つて、このついでにヘルテウ・ン・シヤも含む七人の宰相すべてがイスケンデル・チェレビイの奴隷だつたと解したものとと思われる。
- 325 Turan, IA, IX, 552.
- 326 SO, II, 38.
- 327 Turan, IA, IX, 552.
- 328 Erdoğan, "Pertev Paşa", 233, SO, II, 38.

- 329 Turan, IA, IX, 552.
- 330 "Tarih Kayitları", 79.
- 331 "Tarih Kayitları", 74.
- 332 Rüstem, 148. ʔada Barkan, "H. 954—955 Bütçe", 256.
- 333 Selaniki, 108.
- 334 SO, II, 38.
- 335 Turan, IA, IX, 553.
- 336 Erdoğan, "Pertev Paşa", 237.
- 337 Peçevi, I, 31.
- 338 Mustakimzade Süleyman, Tuhtet ül-Hattatın, İstanbul, 1928, 355. 「フェルハト」がラカーブだということを指摘してゐる(その書物に於て)。(註ト Mustakimzade 之略記トス)
- 339 SO, IV, 16.
- 340 Mustakimzade, 355, Ayyansarayı, Yefeyât, 25.
- 341 Celâzade, 474-a.
- 342 "Tarih Kayitları", 79.
- 343 『年号日附記録集』によれば、フェルハト・アーは、回曆九六五年レビー・エル・エツヴェル月にイェニチェリ・アースィから、他の職に転じてゐる("Tarih Kayitları", 81.)。転出先は原テキストが不明確で編者も「ヘセルキ・シエヒルか? (Her-seki Şehir?)」として疑問のままに残してゐる。しかし、ヘルセクで役職についた証拠は全く見られない。他方、ペチエヴァーは、イェニチェリ・アースィよりカスタモヌのサンジャク・ヘイに転出したと述べてゐる。(Peçevi, I, 31.)。フェルハト

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

が少なくともカスタモヌと特別な關係をもつていたことは、すでに宰相に列した後の九六七年にカスタモヌにモスクを建立し、その名をメフメド・ベグ (Mehtmed Belçet (Yazar), Kastamonu, Âsar-ı Kadimesi, İstanbul, 1341. (Malıye?), 84—85.)) としても、フェルハトは、イェニチエリ・アースィからどこかに転出した九六五年中に宰相に列したものとみられる。これらの点を綜合すれば、九六五年に短期間ではあるがカスタモヌのサンジャク・ベィを勤めたのではないかとの推測がなりたつ。

344 İsmail Hakkı Uzuncarslı, Osmanlı Devleti Teşkilâtından Kapukulu Ocakları, I, Ankara, 1943., 182—183.

345 Selaniki, 138.

346 Mordmann, "İsfendiyâr-Oğulları," *IA*, V-2., 1074., İsmail Hakkı Uzuncarslı, Anadolu Beylikleri, 2nd. ed., Ankara, 1969., 147.

347 その一族は、その後長く続き様々の重要官職就任者を出したらしい。(Mordmann, *IA*, V-2., 1074.)

348 Peçevî, I, 31. シハヤシー・シムヤドのことは Peçevî, I, 37., II, 9—10.

なおウズンチャルシユールの手になるイヌフエンディヤール家の系図によれば、もう一人、ムサ・シヤムサ Paşa も兄弟のイェディシク (Uzuncarslı, Anadolu Beylikleri, 147.) ムサ・シヤハは、ボル Bolu のサンジャク・ベィとなり (Kunt, Sancaktan Eyalete, 127.) をつとめたのち、ヘルズルム・ハイレルムイスイとなったが、九五五年にグルジア人との戦いで戦死した。(Peçevî, I, 35., 280.)

また、イスタフ・シヤの父は、シムサ・メフメット・シイ Mirza Mehmed Bey の、シイブルド・サンジャク・ベィイヌ Bayburd Sancakbeyisi 在任中に戦死したらしい。(Feridun, I, 491.)

349 Peçevî, I, 31.

350 Peçevî, I, 31.

351 "Tarih Kayıtları", 79.

- 352 "Tarih Kayıtları", 83
353 Selaniki, 84.
354 Selaniki, 85.
355 Pecevi, I, 440.
356 Pecevi, I, 41.
357 Pecevi, I, 440.
358 "Tarih Kayıtları", 81
359 "Tarih Kayıtları", 83.
360 Pecevi, I, 440.
361 Selaniki, 155.
362 Selaniki, 159.